

1 せきもりのうちもねぬへきけしきにおもひよはりたまふなるを(九七三・183)

人知れぬわが通ひ路の関もりはよひくごとくうちもねななむ(古今集卷七、恋三、空三、ひんがしの五条わたりに人を知りおきてまかり通ひけり、忍びなる所なりければ門よりしもえいらで垣のくづれより通ひけるぞ、たび重なりければ主人聞きつけてかの道に夜毎に人をふせて守らすれば、いきけれとえあはでのみ帰りにてよみてやりける 業平朝臣・伊勢物語、三・業平集、一六三) (河) (休) (引) (新) (五) (上句ノミ)、(屋) (眠) (湖) (第二句ノミ)、(引) (新) (空) (対) (事) (六) (評) (集)

2 あやしくそむきくにさすがなる御もろ恋なり(九七六・183) みごもりの神し誠の神ならばわが片恋を諸恋になせ(古今六帖第四、片恋、三三三) (河) (休) (絶) (眠) 神しまさしきすぢならば、(五) 我しまさしきすぢならば

3 うちくのことあやまりもよにもりにたるべし(九七六・183) 朝ごとにみし都路の絶えぬればことあやまりにとふ人もなし(後撰集卷十六、雑四、二三三) たよりにつきて人の國のかたはらに侍りて京に久しうまかりのぼらざりける時に友だちに遣しける 読人しらす(拾) あさなく…へだゝれば 4 のこりすくなくなり行すゑの世におもひすて給へるも(九七六

あるはなくなきは数そふ世の中に哀いづれの日まで歎かむ(小町集、一九六) 見し人のなくなりし頃・新古今集卷六、離別、(五) 題しらす 小野小町・栄花物語、見はてぬ夢、(三) 小大君、「哀いづ迄あらむとすらん」(休)

5 中く折やまどはむふぢのはなたそがれどきのたどくしくは(九七四・186)

君にだにゆかたへぬれば藤の花たそがれ時も知らずぞありける(貫之集、(三) 壹・後撰集卷三、春下、一三、かへし貫之、「訪はれてふれば」第二句) (河)、(休) とはれずふれば、(五) (眠) とはれでふれば、(引) とはれでふれば…しられざりけり

6 夏に咲かゝるほどなんあやしう心にくあはれにおほえ侍る(一〇〇一・188)

夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな(拾遺集卷二、夏、三、百首の歌の中に 重之・源重之集、一九三、百首の歌、重之帯刀にて侍りし時春宮に歌召しければ、春二十首) (釈前) (奥) (業) (河) (一) (休) (絶) 松にのみとも、(五) (屋) (眠) (湖) (引) (対) (事) (六) (評) (集)

7 いろもはたなつかしきゆかりにしつべしとてうちほゝゑみ給へる(一〇〇一・188)

葉のひとつと故にむさし野の草はみながら哀れとぞ見る(古今集卷十七、雑上、(六) 七、題しらす 読人しらす・古今六

帖第五、むらさき、三三三六、「草はなべてもなつかしきかな」

〔評〕〔集〕

8 ぬいなきにやおかしきほどにけしきばみ給(100)5・189

① 賢しきと物いふよりは酒飲みて酔泣するしまさりたるらし

〔万葉集卷三、三三、大宰帥大伴卿〕〔河〕かしこしと〔初句〕

…ぬいなきするにまさりてあるらし、〔五〕かしこしと…

まさりて有らし

② 黙然りて賢しらするは酒飲みて酔泣するにほ若かずけ

り〔万葉集卷三、三三、大宰帥大伴卿〕〔河〕たゞにみて〔初

句〕さかしくするは…猶しかずなり、〔五〕〔五〕〔五〕〔五〕〔五〕〔五〕

…猶しかずなり

9 ふぢのうらばのとうちずし給へる御けしきを(100)8・189

① 春日さす藤の裏葉のうらとけて君し思はゞ我も頼まむ〔後

撰集卷三、春下、一〇〇、男のもとよりのめおこせて侍りければ、読人しらす〕〔釈前〕〔絶〕うちとけて〔第三句〕、〔釈書〕

我も尋ねん、〔奥〕〔紫〕我も思はん、〔異〕〔河〕〔二〕〔休〕

〔五〕、〔屋〕朝日さす、〔帳〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔余〕〔全〕

〔対〕〔事〕〔入〕〔評〕〔集〕

② 春へ咲く藤の末葉のうら安にさぬる夜ぞなき子ををし思へ

ば〔万葉集卷古、三三〇〕〔拾〕〔余〕

10 幾かへり露けき春をすぐしきてはなのひもとくをりにあふら

ん(100)13・189

幾かへり咲きちる花をながめつゝもの思ひ暮らす春にあふ

らむ〔新古今集卷十一、恋一、一〇七、年を経て云ひ侍りける

女のさすがにけちかくはあらざりけるに春の未つ方いひ遣

しける 大中臣能宣朝臣 〔異〕〔河〕〔細〕〔休〕〔五〕〔帳〕〔湖〕

すぐしつゝ〔第三句〕、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕

11 例の弁少将とぬいとなつかしくてあしがきをうたふおとどい

とけやけうもつかふまつるかなとうちみだれ給てとしへにけ

るこのいゑのとうちくはへ給へる御とぬいとおもしろし

(100)5・190

葦垣真垣 真垣かきわけ てふ越すと 負ひ越すと 誰

てふ越すと 誰か 誰か この事を 親に まうよこし申

しし とどろける この家 この家の 弟嫁 親に まう

よこしけらしも 天地の 神も 神も 証したべ 我はま

うよこし申さず 菅の根の すがな すがなきことを 我

は聞く 我は聞くかな〔催馬楽、葦垣、三〕〔釈前〕安之

可支未可安支万可支加安介不己春支於比於

多礼仁可太礼可己於と平於於世余未安支与己之ツ末

字之之之とと呂介留字と己乃川戸ロ己乃伊戸乃於上与於

女仁と於世余万安支与己可可美毛安川知乃可見毛

於美毛曾於宇へ之多安と戸仁和礼波万安と支与己ツ、万字

左春川須可乃禰乃於春可名須可奈支己と於と和礼波

支ツ、久和礼波安と支久支可名、〔奥〕安之可支末可支

万可支加支和介天不己春止於比己須止多礼可太礼可己乃

天不己春止止乎於也余末支与己之末支之々止々呂介留己

乃以戸己乃伊戸乃於止与女於也余万支与己之介良之毛安

女川知乃可見毛可美毛曾宇之多戸和礼波万支与己之万字

左春須加乃禰乃春可名須可奈支已止乎和礼波支久和礼波
支久宇之可名、〔紫〕〔異〕〔河〕〔花〕〔休〕〔細〕
〔孟〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕
〔集〕

12 まかでん空もほとくしうこそ侍ぬべけれ (10039・190)

① 歎きこる人いる山の斧の柄のほとくしくも成にけるかな
〔拾遺集卷十四、恋恋、九三、題しらず 読人しらず〕 〔河〕

〔花〕〔休〕〔全〕〔岷〕

② 宮造るひだの匠の手斧音ほとくしかるめをもみしかな
〔拾遺集卷十六、雑恋、二三六、貞盛がすみ侍りける女にくに
もちが忍びて通ひ侍りけるほどに貞盛まうできければまど
ひてぬりごめに隠して、後ろのとよりにがし侍りけるつと
めていひ遣しける くにもち〕 〔花〕〔休〕〔細〕〔孟〕〔岷〕

13 松にちぎれるはあだなる花かはゆしやと (100313・191)

緑なる松にかかれる藤なれど己が頃とぞ花はさきける〔貫
之集、二三五、池のほとりに藤の花松にかゝれる・古今六
帖第六、ふち、三〇八、貫之・新古今集卷三、春下、一六、藤
の松に懸れるをよめる 貫之〕 〔河〕〔引〕松にちぎれる、

〔一〕〔休〕〔細〕常盤なる松に契れる、〔孟〕〔岷〕ときはなる
松にちぎれる藤なれば、〔屋〕ときはなる松にちぎれる花
なれど…花さきにける、〔湖〕常盤なる、〔拾〕〔新〕常盤な
る松に契れる藤なれど、〔全〕〔対〕〔大〕

14 世のためしにもなりぬべかりつるみぞ (10004・191)

① 恋しきに死ぬるものとは聞かねども世のためしにもなりぬ

べきかな〔古今六帖第四、恋、三六六、伊勢・後撰集卷五、
恋六、二二七、つれなく侍りける人に 忠岑、〕恋わびて死ぬ
てふ事はまだなきを〕 〔河〕〔休〕〔細〕恋するは、〔孟〕

〔岷〕〔湖〕恋するに、〔引〕、〔拾〕こひするにしぬる物と
も、〔新〕〔全〕〔事〕〔大〕〔集〕

② いさやまだ恋に死ぬてふ事もなし我をや後の例にはせむ

〔曾丹集、三六三、にし・玉葉集卷五、恋四、二〇六、恋の歌
の中に 順〕 〔拾〕〔余〕〔大〕

15 かはぐちのとこそさしいらへまほしかりつれとの給へば女い

ときくくるとおぼして あさき名をいひながしける川ぐち
はいかゞもらしし関のあらがき あさましとの給さまいとこ
めきたり少しうちはらひて もりにけるくきだのせきを川ぐ
ちのあさきにのみはおほせざらん (10007・192)

① 河口の 関の荒垣や 関の荒垣や 守れども はれ 守れ

ども 出でて我寝ぬや 出でて我寝ぬや 関の荒垣〔催馬
楽、河口、三六〕 〔釈書〕川口のせきのあしがきまもれども
恋てわれぬぬ、〔奥〕加波久知乃せ支乃安良可支やせ支の

あらかきや末もれどもはれまもれども伊でゝわれぬぬや
いでゝわれぬぬやせきのあらがき、〔紫〕〔異〕〔河〕〔花〕
〔一〕〔休〕〔細〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔余〕〔全〕〔対〕
〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

② 河口の関の荒垣いかなれば夜の通ひを許さざるらむ〔古今

六帖第三、関、三九六、新千載集卷三、恋三、三二五、題しら
ず 読人しらず〕 〔異〕よるの通ひ路、〔拾〕

⑨河口の関のあら垣守れども出て我寝ぬしのびく(古今六帖第三、関、三〇五)〔河〕△花▽△休〔細〕△孟△屋△岷△
 16 委ひにかこちてくるしげにてもなしてあくるもしらずがほなり(四〇四・一〇二)

玉すだれ明くるも知らず寝しものを夢にも見じと思ひけるかな(伊勢集、一八五)、長恨歌の御屏風亭子院にはらせ給ひて其の所々をよませ給ひけり御手にて〔紫〕△休△細△
 △孟△岷△松△あくるもしらず…思ひかけきや、〔河〕△思ひかけきや、〔引〕△事△

17 ねくれたれの御あさがほみるかひありかし(四〇四・一〇二)

寝くれたれの朝顔のはな秋ぎりにおもかくしつゝ見えぬきみかな(古今六帖拾遺、三三三)〔河〕△花▽△休△孟△岷△
 △湖△〔引〕△新△

18 さかしき人も女のすぢにはみだるゝためしあるを(四〇五・一〇三)

193 思ひいづるときはのやまの郭公から紅のふり出てぞ鳴く(古今集卷三、夏、一四)、題しらず、読人しらず)〔紫〕からくれなるに

19 おもふやうなる御なからひなめればみつもゝらむやは(四〇七・一〇五)

などてかくあぶごかたみになりけむ水もらさじと結びしものを(伊勢物語、七五)〔河〕△孟△なりぬらん、△休△、△細△成ぬらん…ちぎりし物を、〔屋〕△岷△いかでかく…成ぬらん、△湖△いかでかく、〔引〕△対△事△大△評△

20 おもひけちたりし人もなげきおふやうにてなくなりきと(四〇八・一〇六)

あしかれと思はぬ山の峰にだにおふなる物を人の歎きは(詞花集卷六、雑上、三三)、男をうらみてよめる 和泉式部

△休△人のなげきはおふなるものを、△細△
 21 なにかやけふのかざしよかつみつゝおほめくまでもなりにけるかな(四〇九・一〇七)

天雲のよそにも人の成り行くかさすがにめには見ゆるものから(古今集卷五、恋三、七六)、業平の朝臣紀の有常がむすめにすみけるを恨むることありてしばしのあひだひるはきて夕されば帰りのみしければよみて遣はしける 小野さだき、伊勢物語、四三)〔拾〕△余△

22 かざしてもかたどらるゝくさのなはかつらをおりし人やしるらん(四一〇・一〇七)

久方の月の桂もをるばかりいへの風をもふかせてしかな(拾遺集卷六、雑上、四三)、菅原の大臣かうぶりし侍りける夜はゝのよみ侍りける)〔紫〕△河△〔細〕△孟△岷△〔湖〕△新△
 △全△〔対〕△事△大△集△

23 涙のみとまらぬはひとつものとぞみえたりける(四一一・一〇九)

嬉しきも憂きも心はひとつにて別れぬものは涙なりけり(後撰集卷六、雑三、二六六)、物思ひ侍りける頃やんごとなき高き所よりとはせ給へりければ、読人しらず)〔紫〕△異△
 △河△〔細〕△休△〔細〕△孟△岷△〔湖〕△引△〔新〕△全△〔対〕△事△

〔大〕〔集〕

24 あけむとしよそぢになり給御賀のことをおほやけよりはじめ

奉りて (二〇三三・201)

桜花ちりかひ曇れ老らくのこむといふなる道まがふがに

〔古今集卷七、賀、三〇六、堀河のおほいまうちぎみの四十賀

九条の家にてしける時によめる 在原業平朝臣・伊勢物語、

一七)〔河〕〔五〕〔眠〕

25 あさみどりわかばの菊を露にてもこきむらさきの色とかけき

や (二〇三三・202)

①思ひきや君が衣をぬぎかへてこき紫のいろをきむとは〔後

撰集卷十五、雑一、二二三、庶明朝臣中納言になり侍りける時

うへのきぬつかはすとて 右大臣 〔異〕、〔河〕〔紹〕〔引〕

色をみんとは、ハ一〇〇〔休〕〔五〕〔眠〕

②ふりぬとて思ひも捨てじ唐衣よそへてあやな恨みもぞする

〔後撰集卷十五、雑一、二二三、かへし 雅正〕〔五〕

26 ふた葉よりなだゝるそのゝ菊なればあさき色わく露もなかり

き (二〇四二・202)

①数しらす君が齡をのばへつゝなだゝる宿の露とならなむ

〔後撰集卷七、秋下、三〇四、隣に住み侍りける時九月八日伊

勢が家の菊に綿をきせに遣したりければ又のあしたに折て

かへすとて 伊勢・伊勢集、一〇四七、隣なりける人の許よ

り九月八日菊に綿被けておこせたりけるつとめて取りてや

るにつけて・古今六帖第一、九日、三〇七、伊勢、〔限りな

く〕〔初起〕〔奥〕〔異〕〔河〕〔休〕〔五〕〔眠〕

②露だにもなだゝる宿の菊ならば花の主やいくよなるらむ

〔後撰集卷七、秋下、三〇六、かへし 藤原雅正〕〔花〕〔休〕

〔紹〕、〔五〕〔湖〕菊なれば、〔眠〕

③うへしよりなだゝるそのゝ菊なれば玉とみへてや露もをく

らん〔未詳〕〔引〕

27 せんざいどもなごちいさき木どもなりしもいとしげきかげと

なり一村薄も心にまかせてみだれたりける (二〇四六・202)

君が植ゑし一むら薄虫の音の繁き野べともなりにけるかな

〔古今集卷十六、哀傷、一五五、藤原の利基の朝臣の右近中将に

てすみ侍りけるさうしの身まかりて後人もすまずなりにける

に秋の夜ふけてものよりまうできけるついでに見いれけ

ればもとありし前裁いと茂く荒れたりけるを見て早くそこ

に侍りければ昔を思ひやりてよみける みはるのありす

け・古今六帖第六、すゞき、三〇四六)〔奥〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕

〔五〕〔眠〕〔引〕、〔新〕〔上句ノミ〕、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕

〔集〕

28 なれこそは岩もるあるじみし人のゆくゑはしるややどのまし

水 (二〇四三・203)

我が門のいさゝ小川の真清水のましてぞ思ふ君ひとりりをば

〔古今六帖第六、わきて思ふ、三〇四七)〔河〕〔引〕我が宿の、

〔五〕〔眠〕我が宿のゝ君ひとりとは、〔捨〕いさら小川の、

〔新〕

29 なき人のかげだにみえずつれなくてこゝろをやれるいさらの

水 (二〇四四・203)

なき人のかげだに見えぬ遣水のそこに涙を流してぞこし
 (後撰集卷三、哀傷、二四三)、なくなりにける人の家にまかりてかへりてのあしたにかしこなる人に遣はしける 伊勢・伊勢集、一四六、なくなりにける人の家にまかりてあしたにかしこの人に遣しける)〔河〕そこは涙にながしてぞみし、〔孟〕底は涙にながしてぞみる、〔岷〕そこは涙をながしてぞみる、〔事〕〔大〕〔集〕

30 そのかみのおい木はむべもくちぬらむうへしこ松もこけおひにけり (二〇五10・204)

① 君来ずは形見にせむとわが二人植ゑし松の木君を待ち出でむ (万葉集卷二、二四八) 〔河〕君をまちけん、〔孟〕〔岷〕かたみに見んと…君をまちけん

② いにしへのふるき翁のいはひつゝうへこし松は苔むしにけり (未詳) 〔河〕、〔一〕苔生ひにける、〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔拾〕うへし小松は苔生ひにけり、〔孟〕

③ 妹が名は千代に流れむ姫島の子松が末にこけむすまでに (万葉集卷三、三六、河辺官人・家持集、一〇六、千代に流さむ…苔生ふるまで) 〔拾〕〔余〕

31 いづれをまかけとぞたのむふたはよりねざしかはせる松のすゑん (二〇五12・204)

うちはへて影とそ頼む峰の松色どるあきの風にうつるな
 (後撰集卷七、秋下、三三、題しらず 読人しらず・家持集 一六五・友則集、一五五・古今六帖第六、松、三五、友則) 〔異〕風にもみづな、〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔引〕陰とした

のむ…風にもみづな

32 山のもみぢいつかたもおとらねど西のおまへは心ことなるを (二〇六10・205)

同じえをわきて木の葉の移ろふは西こそ秋の始めなりけれ (古今集卷五、秋下、三三、貞観の御時綾綺殿の前に梅の木有りけり、西の方にさせりける枝のもみぢ始めたりけるをうへにさぶらふをのこどもものよみけるついでによめる 藤原かちおみ勝臣) 〔岷〕〔湖〕〔新〕〔集〕

33 むらさきの雲にまがへるきくのはなにこりなきよのほしかとぞみる (二〇七13・206)

久かたの雲の上にて見る菊は天つ星とぞあやまたれける (古今集卷五、秋下、二六、寛平の御時菊の花をよませ給うける 敏行朝臣・古今六帖第六、きく、三五、敏行・敏行集、二五、菊の花を詠ませ給へるに・和漢朗詠集卷上、秋、菊、三三、敏行) 〔花〕あまつ星かと、〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔全〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

34 ときこそありけれと聞え給ふ (二〇七13・206)

秋をおきて時こそありけれ菊の花うつるふからに色のまされば (古今集卷五、秋下、三三、仁和寺に菊の花めしける時に歌そへて奉れとおほせられければよみて奉りける 平さだふん・古今六帖第六、きく、三五、千里) 〔奥〕〔業〕、〔異〕色のまされる、〔河〕〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕秋をへて…色のまされる、〔岷〕〔湖〕〔引〕、〔新〕〔下句〕、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

35 あをきあかきしらつるばみすはうゑびぞめなどつねのこと
(二〇八・二・206)

①つるばみの衣は人皆事無しといひし時より着欲しく思ほゆ
〔万葉集卷七、三三・古今六帖第五、ころも、三三六、「衣き

る人は…きま欲み思ほゆ〕〔最〕衣きる人は…聞てし人よ

り、〔河〕〔休〕きぬきし人は、〔紹〕〔孟〕〔眠〕きぬきし人は
…きまほしくおもほゆ

②つるばみの一重衣のうらもなくあるらむ兒ゆゑ恋ひ渡るか
も〔万葉集卷七、三三六〕〔河〕あらんとゆへに、〔孟〕あら

むとゆへど、〔眠〕あらんといへど
③つるばみの解濯衣のあやしくも殊に着欲しきこの夕かも
〔万葉集卷七、三三四〕〔河〕〔眠〕ときあらひ衣…ことにきま

ほしきこの夕かな

④つるばみの袷の衣裏にせば我強ひめやも君が来まさぬ〔万
葉集卷七、三三六・古今六帖第五、ころも、三三三〕「我恋ひ

めやは〕〔河〕あはせのきぬの…我こひんかも

若菜上

1 たれをたのむかげにて物し給はんとすらむと(二〇六・二・212)

①わび人のわきて立ちよる木のもとは頼む蔭なく紅葉散りけり
〔古今集卷五、秋下、三三、雲林院の木のかげにたゝずみ

てよみける 僧正遍昭・遍昭集、一六六四、雲林院の木のかげ
にたゝずみありきて)〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔眠〕〔但不及引

歌)

②おきつなみ あれのみ増る 宮のうちは 年へてすみし
伊勢の蟹も ふね流したる こゝちして よらむ方なく

かなしきに なみだの色の くれなるは われらが中の
しぐれにて 秋のみみちと ひとぐは 己がちりぐ

わかれば 頼むかげなく なりはてゝ とまる物とは
はなすゝき きみなき庭に むれたちて 空をまねかば

はつがりの なき渡りつゝ よそにこそ見め〔古今集卷
六、雑体、短歌、一〇六、七条の后うせ給ひにける後によみ
ける 伊勢〕〔集〕

2 女官たちのあまたのこりとまゝまる行ききをおもひやるなんさ
らぬ別にもほだしなりぬべかりける(二〇六・14・213)

①老いぬればさらぬ別れもありといへばいよいよ見まくほし
き君かな〔古今集卷七、雑上、九〇、業平朝臣の母のみこ

長岡に住み侍りける時に業平宮つかへすとて時々も得まか
りとぶらはず侍りければしはすばかりに母のみこのもとよ

りとみの事とて文をもてまうできたり、あけて見れば言葉はなくてありける歌・伊勢物語、一六、「さらぬ別れの」

〔釈前〕〔異〕さらぬ別れの、〔紫〕〔河〕、〔西〕〔第二句ノミ〕、

〔唄〕〔私此歌に不及歎〕、〔湖〕〔新〕〔上句ノミ〕、〔対〕〔事〕

〔大〕〔評〕〔集〕

②世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もと歎く人の子のた

め〔古今集卷十号、雑上、六〇〕・伊勢物語、一六・業平集、二六

〔西〕〔引〕

③世の憂き目見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなり

けれ〔古今集卷十六、雑下、五三〕、おなじ文字なき歌 物部

よしな〔唄〕〔大〕〔評〕〔集〕

3 このみちのやみにたちまじりかたくななるさまにやとて〔〇

六四・二五〕

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな

〔後撰集卷十号、雑二、二〇三〕、太政大臣の左大将にてすまひの

かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ

れかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとて

めてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のうち

へなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、親、

三三三三、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一三三三、

子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言〔紫〕、〔異〕

〔河〕〔休〕〔絶〕まよひぬるかな、〔西〕〔屋〕〔第二句ノミ〕、

〔唄〕まよひぬるかな〔私云引歌に不及〕、〔引〕〔事〕〔評〕

〔集〕

4 いかでちりもすゑたてまつらじとかたらふ〔〇四八・221〕

塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしよりいとわがぬる床夏の

花〔古今集卷三、夏、二六〕、隣よりとこ夏の花をこひにおこ

せたりければをしみてこの歌をよみて遣はしける 躬恒・

古今六帖第六、なでしこ、三三三三、「植ゑしより」・和漢朗詠

集卷上、秋、前裁、三三三三〔紫〕〔異〕、〔休〕〔第二句ノミ〕、

〔絶〕〔屋〕〔新〕〔大〕〔評〕

5 いまの世のやうとてはみなほがらかにあるべかしくて〔〇六

一・223〕

うち忍び歎き明かせばしののめのほがらかにだに夢をみぬ

かな〔紫式部集、三二七号、人のおこせたる〕〔拾〕〔余〕

6 なきおやおのおもてをふせかげをはづかしむるたぐひ〔〇四

一・224〕

かざせども老も隠れぬこの春ぞ花のおもてはふせつべらな

る〔後撰集卷三、春下、六六〕、延喜の御時殿上のをのことも

のなかにめしあげられておのゝかざしさしける序に 凡

河内躬恒〔河〕花のおもても〔不本は〕、〔西〕花のおもても、

〔唄〕花のおもても〔不及此歌〕

7 心づからのしのびわざしいでたるなん〔〇三三〇・225〕

春風は花のあたりをよきてふけ心づからや移ろふとみむ

〔古今集卷三、春下、六六〕、春宮のたち花の陣にて桜の花のち

るをよめる 藤原好風・古今六帖第一、春の風、三三三三、藤

原好風〔紫〕〔異〕

8 いまさらになちかへりにわか物や思はせきこえん〔〇四〇

10・228

①かねてよりつらさをわれにならばきでにはかにもを思は
するかな〔未詳〕〔異〕、〔河〕つらさを人の〔未本真我我に〕

△弄▽〔一〕、〔休〕つらさを人に、〔紹〕つらさを人の、

〔孟〕〔岷〕〔湖〕、〔引〕つらさを君が、〔拾〕〔新〕〔烈〕〔事〕

〔六〕〔評〕〔集〕

②よしさらばつらさは我に習ひけり頼めて来ぬは誰か教へし

〔清少納言集、三三三〕、語らふ人のあさてばかりこむといひ

し日もみえず久しくなりて覚束なくなりければ御心のつ
らさに習ひにける何とかはといひたる返事に・詞花集卷九、

雑上、三五、たのめたる夜見えざりける男の後にまうでき

たりけるにいで逢はざりければいひわづらひてつらきこと

を知らせつるなどいはずせたりければよめる 清少納言

〔六〕

9 みづからのためにもあさからぬほだしになんあるべき〔四〕

14・230

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなり

けれ〔古今集卷六、雑下、五三〕、おなじ文字なき歌 物部

よしな〔紫〕〔事〕〔評〕

10 さしながらむかしをいまにつたふればたまのをぐしぞ神さび

にける〔四〕6・232

①大空にむれたるたづのさしながら思ふ心のありげなる哉

〔拾遺集卷五、賀、二四〕、五条の内侍のかみの賀民部卿清貫
し侍りける時屏風に 伊勢〔花〕〔岷〕

②さしながら人の心をみ熊野の浦の浜ゆふいくへなるらむ

〔拾遺集卷七、恋四、八六〕、屏風にみくま野のかたかきたる
所 兼盛〔花〕

11 さしつぎにみる物にもがよるつ世をつげのをぐしの神さふる

まで〔四〕10・232

葦の屋の灘の塩焼いとまなみ黄楊の小櫛も挿さず来にけり

〔伊勢物語、一三・新古今集卷七、雑中、二五八、在原業平朝

臣〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕

12 子を思ふ道はかぎりありけりかく思しづみ給へる別のたへが

たくもあるかな〔四〕1・233

人の親の心は聞にあらねども子を思ふ道に感ひぬるかな

〔後撰集卷五、雑一、二二〕、太政大臣の左大将にてすまひの

かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ

れかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとど

めてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のう

へなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、親、

三三三、「迷ひぬるかな」大和物語、五二・兼輔集、二六六、

子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言〔紫〕〔事〕

〔評〕〔集〕

13 おましよそひくはへてくれたてまつり給へる〔四〕1・234

※いれたてまつり給ふーいれたてまつり給かはりたまへる青

御横陽国冨三河別保

忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見むとは

〔古今集卷六、雑下、五三〕、惟喬のみこの許にまかり通ひけ

るをかしらおろして小野といふ所に侍りけるに正月にとぶらはむとてまかりたりけるにひえの山の麓なりければ雪いと深かりけり、しひて彼のむろにまかりいたりてをがみけるに徒然としていと物悲しくて帰りまうできてよみて送りける 業平朝臣・伊勢物語、一六・業平集、一六三・古今六帖第一、雪、三五九 (新) 第二句ノミ

14 いとしのびがたきことおほかりぬべきわざにこそ侍けれとなぐさめたくおぼしたり (古今八・234)

我が心なぐさめかねつ更科やははすて山に照る月を見て

(古今集卷十七、雑上、七六、題しらず 読人しらず・古今六帖第一、雑の月、三二六・大和物語、セ二) (集)

15 けふかあすかとおぼえ侍つ (古今十・234)

① 我が世をば今日かあすかと待つかひの涙の玉といづれまさ

れり (伊勢物語、二五・新古今集卷十七、雑中、二四六、布引の滝見にまかりて 中納言行平、涙の滝と何れ高けむ) (河) (休) (孟) (岷) 涙の滝といづれたかけん、(大)

② 人の身の老を果てにしせましかば今日かあすかと急がざら

まし (朝忠集、一三六、世の中騒がしき頃) (河) なげかざらまし、(異) 人の世を…けふかあすかもなげかざら

し、(絶) 世の人の…けふかあすかもなげかざらまし、

(孟) (岷) (湖) (引) (拾) 人の世の…なげかざらまし、(大) (集)

③ 心にもかなはざりける命もて頼みも置かず常ならぬ身は

(朝忠集、一三五、女返し) (拾) (新)

16 とりかへすべきにもあらぬ月日のすぎゆけば心あはたしくなむ (古今七・236)

① 池にすむ我が名ををしのとり返す物にもがなや人を恨みじ

(金葉集卷七、恋上、四六、人をうらみてつかはしける 藤

原惟規) (拾) (余)

② 大空を取りかへすともきかなくに星かとみゆる秋の菊かな

(新撰万葉集卷下、秋、〇) (拾) (余) あめつちを…星ととみゆる

③ 取り返す物にもがもや箱鳥の明けて悔しき物をこそ思へ

(古今六帖第六、はこどり、三三三) (拾) (新) (余)

17 中くいとふかさこそまさらめ (古今十・238)

我がためはいとゞ浅くやなりぬらむ野中の清水深さまされば (後撰集卷十一、恋三、七五、もとのめにかへりすむときゝ

て男のもとに遣はしける 読人しらず) (花) わがために、

(休)、(絶) (引) 歌に不及、(孟) (岷) (引)

18 すべて世の人のくちといふ物なんたがいひいづる事ともなく

をのづから人のなからひなどうちほをゆがみおもはずなる

事いでくる物なるを (古今七・239)

① 汝をと吾を人ぞ離くなるいで吾君人の中言聞きこそなゆめ

(万葉集卷四、交〇、大伴坂上郎女) (河) (休) (孟) (湖) (引)

人なかを…ゆめよきみ…きゝたつなきみ、(岷) 人なかを人にさくなるゆめよきみ…きゝたつなきみ、(拾) (第二三句ノミ)

② いふ言の恐き国そ紅の色にな出でそ思ひ死ぬとも (万葉集

卷四、六三、大伴坂上郎女〔拾〕

19 かくそらよりにできにたるやうなる事にてのがれ給がたきを

(二三・10・240)

つれづれと空ぞみらるゝ思ふ人あまくだりこん物ならなく

に〔和泉式部集、文庫本一、恋・玉葉集卷下、恋二、四六六、百首の歌の中に 和泉式部〕〔拾〕つくとくと

20 つねにうけはしげなる事どもをの給いでつゝ(二三・14・240)

罪もなき人をうけへば忘れ草おのが上にぞ生ふと言ふなる

〔伊勢物語、志〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔五〕〔岷〕

21 正月廿三日ねのひなるに左大将殿の北方わかなまいり給(二〇・10・241)

君がため春の野に出で、若菜つむわが衣でに雪は降りつゝ

〔古今集卷一、春上、三、仁和のみかどみこにおはしましける時人に若菜たまひける御歌 読人しらす・古今六帖第一、若菜、三五三〕〔絶〕

若菜、三五三

22 御かざしのだいにちんしたんをつくり(二三・5・241)

①春くれば宿にまづさく梅の花君が千歳のかざしとぞ見る

〔古今集卷七、賀、三三三、もとやすのみこの七十賀のうしろの屏風によみてかきける 紀貫之・古今六帖第四、かざし、三三六、貫之〕〔新〕

三三六、貫之

②露ながら折りてかざゝむ菊の花おいせぬ秋の久しかるべく

〔古今集卷五、秋下、三三〇、是貞のみこの家の歌合の歌 紀友則・友則集、一三三、惟貞のみこの歌合に・古今六帖第四、かざし、三三六、紀友則〕〔新〕

23 大将のかゝるついでにだに御らむせざせんとてふたりおなじ

やうにふりわけがみのなかに(二三・14・242)

くらべこし振分髪も肩過ぎぬ君ならずして誰かあくべき

〔伊勢物語、六三〕〔河〕、〔五〕〔初句ノミ〕、〔湖〕〔上句ノミ〕

24 人よりことにかぞへとり給けるけふのねのひこそ(二三・5・242)

①かぞへしる人なかりせばおく山の谷の松とや年をつまゝし

〔千載集卷下、雑上、五五、上東門院より六十賀おこなひ給ひける時よみ侍りける 法成寺入道前太政大臣〕〔異〕〔河〕

〔休〕〔絶〕〔五〕〔屋〕〔岷〕〔拾〕

②あしたつのはひしあらば君が代の千歳の数も数へとりて

む〔紫式部集、三六五、との・統拾遺集卷下、賀、七五〇、題しらず 法成寺入道前摂政太政大臣、千歳の数は〕・栄花物語、初花、三三、藤原道長〕〔拾〕すべらきの八千代の数

も

25 小松ばらす糸のよはひにひかれてやのべのわかなも年をつむ

べき(二三・12・243)

春の野の若菜ならねど君がため年の数をもつまむと思ふ

〔拾遺集卷五、賀、二五、五条の内侍のかみの賀民部卿清貫し侍りける時屏風に 伊勢・伊勢集、一三三、此の内侍の

かみの四十の賀を清貫の民部卿仕うまつり給ひける御屏風の若菜摘みたる所に・古今六帖第四、若菜、三三六、伊勢〕

〔河〕〔五〕〔岷〕〔湖〕〔引〕春日野の

26 夜ふけ行まゝに物のしらべどもなつかしくかはりてあをやぎ

あそび給ほどけにねぐらのうぐひすおどろきぬべくいみじく
おもしろし (二〇五13・245)

①青柳を 片糸によりて や おけや 鶯の おけや うぐ
ひすの 縫ふといふ笠は おけや 梅の花笠や(催馬楽、

青柳、凸〔巻〕〔異〕△河▽〔二〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔峴〕〔湖〕

〔引〕〔新〕〔余〕〔対〕〔事〕〔六〕〔評〕〔集〕

②短か夜のふけゆくまゝに高砂のみねの松風ふくかどぞきく

(後撰集卷六、夏、一六号、夏の夜深養父が琴ひくを聞きて
藤原兼輔朝臣) (拾)

27 とし月のゆくゑもしらすがほなるを (二〇五3・245)

年月の行く方も知らぬ山がつはたきの音にや春をしるらむ

(拾遺集卷六、雑春、一〇〇、北宮の屏風に 右近) (河)

春をまつらん、〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔新〕

28 かうかぞへしらせ給へるにつけては心ほそくなん (二〇五4・
245)

数へしる人なかりせばおく山の谷の松とや年をつまゝし

(千載集卷六、雑上、九六、上東門院より六十賀おこなひ給
ひける時よみ侍りける 法成寺入道太政大臣) (花)〔細〕

〔休〕〔紹〕〔峴〕〔湖〕〔新〕いたづらに〔第三三〕、〔孟〕〔引〕

29 時くはおひやまさるとみたまひくらべよかし (二〇五4・245)

鏡山いざ立ち寄りて見てゆかむ年へぬる身は老やしぬると

(古今集卷七、雑上、八六、題しらす 読人しらす) (紫)

〔異〕

30 たゞ人におはすればよろづの事かぎりありて内まいりにもに

すむこのおほ君といはんにもことたがひてめづらしき御なか
のあはひどもになん (二〇五3・246)

我家は 帷帳も 垂れたるを 大君来ませ 簪にせむ 御

着に 何よけむ 鮑采螺 石陰子よけん 鮑采螺 石陰子
よけん(催馬楽、我家、凸) △花▽△孟▽△峴▽〔引〕〔事〕

〔余〕〔評〕〔集〕

31 かのむらさきのゆかりたづねとり給へりしおり (二〇五13・247)

紫のひとつもと故にむさし野の草はみながら哀れとぞ見る

(古今集卷七、雑上、八六、題しらす 読人しらす・古今六
帖第五、むらさき、三〇四、草はなべてもなつかしきかな)

〔評〕

32 つらづえをつき給てよりふし給へれば (二〇五12・248)

歎きこる山とし高くなりぬればつら杖のみぞまつつかれけ

る(古今集卷六、雑体、誹諧、二〇六、題しらす 大輔)
〔紫〕〔異〕、〔孟〕〔第二句ノミ〕、〔余〕

33 めにちかくうつればかはる世の中を行すとぞくたのみける

かな (二〇五14・248)

①秋萩の下葉につけてめに近くよそなるひとの心をぞみる

(拾遺集卷七、雑秋、二二六、ちかどなりなる所に方たがへ
にわたりに宿れりと聞きてある程にことにふれてみきくに

歌よむべき人なりと聞きてこれが歌よまむさまいかでよく
みむと思へども心にしあはねば深くも思はず進みて

もいはぬ程にかれも亦心みむと思ひければ萩の葉のみみち
たるにつけて歌をなむおこせたる 女・貫之集、(二〇五)

〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔大〕〔集〕

②天雲のよそにも人のなり行くかさすがにめには見ゆるもの
から〔古今集卷十五、恋三、五六、業平の朝臣紀の有常がむす
めにすみけるを恨むることありてしばしのあひだひるはき
て夕されば帰りのみしければよみて遣はしける・伊勢物
語、四〕〔新〕〔大〕

34 いつかたもみなこなたの御けはひにはかたさはゞかるさま
にて〔古今集卷九、249〕

こたくに思ひけかもしたへの枕片去る夢に見えける
〔万葉集卷四、三三〕〔拾〕いくそはく：枕かたさり夢に見え
こし

35 我身までのことはうちをきあたらしくかなしかりしありさま
ぞかし〔古今集卷三、251〕

①いかにかとおもふ心のある時は我が身をゝきて人ぞかなし
き〔古今六帖拾遺、三三三〕〔異〕〔河〕〔休〕、〔紹〕いかにぞ
と、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕

②いかでかと思ふ心のある時はおほくさへぞうれしかりけ
る〔拾遺集卷十一、恋一、六五、題しらず よみ人しらず〕

〔拾〕
③わびしさに同じ心ときくからに我が身をすてゝ君ぞ悲しき
〔後撰集卷十、恋三、五九、かへし 源信明・信明集、二〇四号、
かへし〕〔拾〕

36 あげぐれの空に雪のひかりみえておぼつかなし〔古今集卷十二、251〕
明け暮の空にぞわれはまよひぬる思ふ心のゆかぬまに

〔拾遺集卷十二、恋三、三六、女のもとよりくらきに帰りに遣
はしける 順〕〔業〕〔異〕〔河〕〔休〕まどひぬる：ゆかんま
に、〔紹〕〔不及引歌〕、〔孟〕まどひぬる、〔岷〕私不
及引歌〕

37 なごりまでとまれる御にはひやみはあやなしとひとりこたる
〔古今集卷十二、251〕

春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隠るゝ
〔古今集卷二、春上、四、春の夜梅の花をよめる 躬恒・古
今六帖第六、梅、三〇七、躬恒・和漢朗詠集卷上、春、春夜、
三、躬恒〕〔釈前〕、〔奥〕、〔一〕〔孟〕〔湖〕〔上句ノミ〕、〔業〕〔異〕
〔河〕、〔休〕〔第二句ノミ〕、〔紹〕〔屋〕〔岷〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕
〔事〕〔大〕〔評〕

38 なかみちをへたつるほどはなけれども心みだるゝけさのあは
雪〔古今集卷二、253〕

かつ消えて空も乱るゝあわ雪はもの思ふ人の心なりけり
〔後撰集卷六、冬、四〇、雪のすこしふる日女に遣はしける
藤原かげもと・古今六帖第一、雪、三三三、心なるなり〕
〔花〕〔休〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕空にみだるゝ、〔全〕〔対〕
〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

39 ともまつ雪のほのかにのこれるうへにうちちりそふそらを
〔古今集卷四、253〕

①ふりそめて友まつ雪はうば玉のわが黒髪の変るなりけり
〔後撰集卷六、冬、四三、雪のあした老を歎きて 貫之・貫
之集、二〇三、宰相中將のみもとに老いぬることを歎きて、

「ぬば玉の」・古今六帖第三、おきな、三三三、貫之、「ぬば玉の黒髪のみた」〔河〕むば玉の、〔休〕細、〔五〕色ふりわけて…むば玉の、〔屋〕、〔岷〕むば玉の（不及此歌）、〔湖〕〔引〕〔対〕〔大〕〔評〕

②白雪の色わきがたき梅が枝に友待つ雪ぞ消え残りたる（家持集、一六〇四）〔捨〕白妙の、〔新〕白妙の…消え残りける、

〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

③梅の花さくと知らずやみ吉野の山に友まつ雪のみゆらむ（貫之集、一三三三、延喜十六年齋院の御屏風の料の歌内裏より仰せ承りし六首人の家に女どの庭に出で、梅の花を見又山に残れる雪を見たる・風雅集卷二、春上、五、延喜十六年齋院の屏風に人の家に女どもの梅の花見或るは山に残れる雪を見たる所 貫之）〔捨〕

40 うぐひすのわかやかにちかきこうばいのすゑにうちなきたるを袖こそにはへと花をひきかくして（二〇五五・253）

をりつれば袖こそにはへ梅の花ありとやこゝに驚のなく（古今集卷一、春上、三、題しらず 読人しらず・伊勢集、一三五〇）〔釈前〕〔奥〕、〔紫〕おもへれば〔初句〕、〔異〕袖にて

にはへ、へ弄（一）、〔細〕〔五〕〔上句ノミ〕、〔休〕〔紹〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

41 はなといははかくこそにははまほしけれなきくらにうつしては又ちりばかりも（二〇五九・254）

梅の香を桜の花にほはせて柳が枝にさかせてしかな（後拾遺集卷一、春上、二、題しらず 中原致時）〔紫〕〔異〕梅

がを…さかせたらなん、〔河〕〔岷〕〔引〕梅がを、〔二〕〔第二句ノミ〕、〔休〕〔五〕〔上句ノミ〕、「梅がを」、〔紹〕〔大〕〔集〕

42 これもあまたうつろはぬほどめとまるにやあらむ（二〇六〇・254）

あはれてふ事をあまたにやらじとや春に後れてひとりさくらむ（古今集卷三、夏、一、卯月にさける桜を見てよめる 紀としさだ）〔捨〕〔余〕

43 そむきにしこの世にのこるころこそいる山みちのほだしなりけれ…そむくよのうしろめたくはさがりがたきほだしをしめてかげなはなれそ（二〇七四・257）

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ（古今集卷六、雑下、九、おなじ文字なき歌 物部よしな）〔紫〕、〔異〕〔紹〕みえぬ山路に、〔河〕〔五〕〔岷〕、〔湖〕〔第二句ノミ〕、〔引〕〔新〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

44 やみをえはるけできこゆるもおおこがましくやとあり（二〇七五・257）

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな（後撰集卷五、雑一、二、太政大臣の左大将にてすまひのかへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこれかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人ばかりとめてまらうとあるじ酒あまたのびの後酔にのりて子供のうへなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、親、三三三、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、二六六、

子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言〔積書〕〔業〕

〔異〕〔屋〕〔引〕〔新〕〔事〕〔集〕

45 人づてならでものごしにきこえしらすべきことなるある〔二〇六・258〕

いかにしてかく思ふてふことをだに人伝ならで君に語りむ

〔後撰集卷十三、恋三、六三、忍びてみくしげ殿のべたうにあ

ひかたらふと聞きて父の左大臣のせいし侍りければ 敦忠

朝臣・大和物語、五〇、〔事〕

46 人はもりきかぬやうありとも心とはんこそいとほづかしかな
るべけれ〔二〇六・259〕

なき名ぞと人にはいひてありぬべし心とはゞいかゞ答へ

む〔後撰集卷十三、恋三、七六、親ある女に忍びて通ひけるを

男もしはしば人に知られじと言ひ侍りければ 読人しらす

ず〕〔釈前〕、〔釈書〕人にはいひて、〔奥〕〔業〕〔異〕〔河〕

△弄▽、〔二〕〔第二句ノミ〕、〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕

〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

47 たちにし我名いまさらにとりかへし給べきにやとおぼしをこ
して〔二〇六・259〕

むら鳥の立ちにし我が名今さらることなしぶともしるしあ

らめや〔古今集卷十三、恋三、六四、題しらす 読人しらす・

古今六帖第六、とり、三三三〕〔釈前〕、〔釈書〕ことならぶ

とも、〔奥〕〔業〕〔異〕〔河〕〔二〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕

〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

48 このしのだのもりをみちのしるべにてまうで給〔二〇六・259〕

①よも恋しわれをば恋しいづみなる信田の森のしづくなるら

む〔未詳〕 〔釈前〕〔異〕〔事〕

②つくぐとおつる涙はいづみなる信濃太のもりにおとらざ
りけり〔未詳〕 〔釈書〕

③わが思ふことのしげさにならぶれば信田の森の千重はもの

かは〔未詳〕 〔業〕〔異〕〔事〕

④いづみなる信太の森の桐の木のちへに別れてものをこそ思

へ〔未詳〕 〔花〕〔引〕くすの木も、〔休〕〔初句ノミ〕、〔紹〕くす

の葉も、〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

49 たまもにあそぶをしのこゑぐなどあはれにきこえて〔二〇七・261〕

春の池の玉藻に遊ぶにほ鳥の足のいとなき恋もするかな

〔後撰集卷三、春中、三、題しらす 宮道高風〕〔異〕〔河〕

をし鳥の、〔一〕〔上句ノミ〕、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕

〔新〕〔全〕〔対〕〔大〕〔評〕〔集〕

50 とし月を中にへだてゝあふさかのさもせきがたくおつる涙か
女 なみだのみせきとめがたきしみづにて行あふみちははや

くたえにき〔二〇七・261〕

①もる人もありとはきけど逢坂の関もとどめぬ我が涙かな

〔後撰集卷十三、恋三、六三、返し、読人しらす〕〔河〕〔休〕も

る人の、〔紹〕、〔孟〕もる人のあるとはきけど、〔岷〕〔事〕

②あふ坂の関の清水にかけみえていまや引くらむ望月の駒

〔拾遺集卷三、秋、一七、延喜の御時月次の御屏風に 貫之

〔対〕〔大〕

51 あさばらけのたならぬ空にもちどりのこゑもいとつらゝ
かなり (一〇三三・262)

① わが門の榎の実もり喫む百千鳥は来れど君ぞ来まざる
(万葉集卷十六、三三三) (新) (余) 我がやとのえのみとりは
む…君はきまざる

② もち千鳥さへづる春はものごとにあたまれども我ぞふり
ゆく (古今集卷三、春上、二、題しらす 読人しらす) (余)

52 いかでかこのかげをばたちはなるべきとわりなくいでてに
おぼしやすらひたり (一〇三三・262)

今日のみと春を思はぬ時だにもたつことやすき花のかげか
は (古今集卷三、春下、一、言、亭子院の歌合に春のはての歌
躬恒・躬恒集、一五〇〇・亭子院歌合、三五六、躬恒・和漢朗
詠集卷上、春、三月尽、五、躬恒) (拾) (新) (事)

53 しづみしもわすれぬものをこりすまに身もなげつべきやどの
藤なみ いといたくおぼしわつらひてよりみ給へる心ぐるし
うみたてまつる女君もいまさらにいとつましくさままに
思みだれ給へるに花のかげは猶なつかしくて 身をなげんふ
ちもまことのふちならでかけじやさらにこりすまの浪 (一〇三
三・263)

① 恋しさに身を投げつべし慰むることに従ふ心ならねば (興
風集、一六三四) (異) 恋しきに、(河) 恋しきに (真本恋しきに、
五) (唄)

② こりすまに又もなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にしす
まへば (古今集卷十三、恋三、六三、題しらす 読人しらす)

(河) (紹) (孟) (唄) (湖) (引) (新) (余) (大) (集)

③ 樟させと深きもしらぬ藤なれば色をも人もしらじとぞ思ふ
(後撰集卷三、春下、三、三月の下の十日計に三条の右大
臣兼輔の朝臣の家にまかり渡りて侍りけるに藤の花さける
遣水のはとりにてかれこれ大みきたうべけるついでに 貫
之) (河) (孟) (唄) (引) (色をば人も)

④ 風を痛みくゆる煙の立ちいで、猶こりすまの浦ぞ恋しき
(後撰集卷十三、恋四、六六、人のむすめのもとに忍びつゝ通
ひ侍りけるを親聞きつけていといたくいひければかへりて
つかはしける 貫之) (余)

54 せきもりのかたからめたゆみにやいとよかつたらひをきて
(一〇三三・263)

人知れぬわが通ひ路の関よりはよひくごとくにうちも寝な
なむ (古今集卷三、恋三、六三、ひんがしの五条わたりに人
を知りおきてまかり通ひけり、忍びなる所なりければ門よ
りしもえいらで垣のくづれより通ひけるを、たび重なりけ
れば主人聞きつけてかの道に夜毎に人をふせて守らすれ
ば、いきけれどえあはでのみ帰りによみてやりける 業平
朝臣・伊勢物語、三・業平集、一六三三) (業) (異) (河) (休)
(紹) (孟) (唄) (引) (事) (集)

55 ありしよりけにふかき契をのみながき世をかけてきこえ給
(一〇三三・264)

忘るらむと思ふ心の疑ひにありしよりけにものぞ悲しき
(伊勢物語、五・新古今集卷十五、恋五、一三六、題しらす 読

人しらす(紫)〔異〕〔河〕〔孟〕、〔岷〕〔不及引歌〕、〔湖〕〔引〕〔新〕

56 むかしをいまにあらためくはへ給ほど(二〇四六・264)

いにしへのしづのをだまきくり返し昔を今になすよしもがな(伊勢物語、二〇)〔秋前〕〔秋書〕〔河〕〔孟〕しづやしづ、

〔奥〕〔卷〕〔異〕、〔休〕〔第二句ノミ〕、〔紹〕、〔岷〕しづやしづ(私不及引歌賦)、〔引〕〔集〕

57 なかぞらなる身のためくるしくとてさすがに涙ぐみ給へるまみの(二〇四七・264)

中空に立ちあがる雲の跡もなく身のはかなくもなりけるかな(伊勢物語、吾・新古今集卷五、恋五、三三六、題しらす 読人しらす、「なりぬべきかな」)〔新〕

58 身にちかく秋やきぬらんみるまゝにあを葉の山もうつろひにけり(二〇四七・268)

①秋の露は移にありけり水鳥の青葉の山の色づく見れば(万葉集卷八、一四四、三原王・古今六帖第三、山、三七七)〔異〕身にちかく秋ぞきにけり水音の、〔紹〕〔引〕白露はうつしなりけり

②秋といへばよそにぞ聞きしあだ人の我をふるせる名にこそありけれ(古今集卷五、恋五、二四、題しらす 読人しらす)〔拾〕〔新〕〔余〕〔大〕

59 水鳥のおをばはいろもかはらぬに萩のしたこそけしきことなれ(二〇四九・268)

①白露はうつしなりけり水鳥の音羽の山の色づくみれば(古

今六帖第一、八月、三〇(異・同第三、山、三七七)

紅葉する秋は来にけり水鳥の音羽の山の色づく見れば(古今六帖第三、水鳥、三三三)〔河〕しらす露はうつしなりけり(もみぢする秋はきにけりイホ)、〔休〕〔岷〕〔余〕白露はうつしなりけり

②秋の露は移にありけり水鳥の青葉の山の色づく見れば(万葉集卷八、一四四、三原王・古今六帖第三、山、三七七)〔拾〕〔新〕、〔余〕秋の露うつしなりけり、〔大〕

③秋萩の下葉色づく今よりや独りあるひとのいねがてにする(古今集卷四、秋上、三〇、題しらす 読人しらす)〔拾〕〔新〕〔全〕〔大〕

60 おなじかざしをたづねきこゆればかたじけなけれど(二〇五〇・269)

我が宿と頼む吉野に君し入らば同じかざしをさしこそはせめ(後撰集卷三、恋四、八二)、かへし 伊勢・古今六帖第四、かざし、三三六、伊勢、「君が行かば」・伊勢集、一七二、返し)〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔余〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

61 しろき物どもをしなくかつぎて山ぎはよりいけのつゝみすぐるほどのよそめはちとせをかねてあそぶつるのけごるもに思まがへらる(二〇一四・272)

席田せじうの 席田の 伊津貫川に や 住む鶴の 住む鶴の や 住む鶴の 千歳を予ねてぞ 遊びあへる 千歳を予ねてぞ 遊びあへる(催馬楽、席田、四) 〆奥〆(卷)〔異〕

〔河〕〆弄〆〆〆〆〆〔休〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕

〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

62 むかしの世にもかやうなる人はつみゆるされてなん侍ける
 (二〇五・9・281)

翁さび人なとがめそ狩衣今日ばかりとぞたづもなくなる

〔後撰集卷十五、雜二、二〇号、同じ日鷹飼にてかりぎぬの袂に
 鶴のかたをぬひてかきつたりける 在原行平朝臣・伊勢
 物語、三〇〕〔集〕

物語、三〇〕〔集〕

63 よをすてゝあかしのうらにすむ人も心のやみははるけしもせ
 じ (二〇五・14・281)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな

〔後撰集卷十五、雜二、二〇三、太政大臣の左大将にてすまひの
 かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ
 れかれ罷りあかれけるにやんごとなき人二三人はかりとせ
 めてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のう
 へなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、親、
 三三三三、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一三三三、
 子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言〕〔集〕

64 はちすのうへのつゆのねがひをばさしをきてなむ (二〇五・9・

285)

はちす葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむ

く〔古今集卷三、夏、一奎、蓮の露を見てよめる 僧止遍
 昭・遍昭集、一六六六、はちすに露のおきたるを、〕などかは
 露を〔古今六帖第六、はちす、三三三三、へんせう・和漢朗
 詠集卷上、夏、蓮、一六二〕〔評〕

65 水草きよき山のすゑにてつとめ侍らむとて (二〇五・13・286)

とつ国は水草きよきことしげき都のうちはすすまされる

〔未詳〕〔休〕〔紹〕、〔岷〕〔湖〕〔新〕すすまされり、〔引〕水

くさ清し…すすまされり、〔大〕〔集〕

66 ひかりいでんあか月ちかくなりにけりいまだみしよの夢がた

りする (二〇五・14・286)

①光出づる葵の影をみてしかば年へにけるも嬉しかりけり

〔後拾遺集卷十六、雜五、二〇六、後一条院をさなくおはしまし
 ける時祭御覽しけるにいつきのわたり侍りけるをり入道前
 太政大臣いだきたてまつり侍りけるをみたてまつりてのち
 に太政大臣の許につかはしける 選子内親王・大鏡卷四、六
 六 選子内親王、「みてしより」〕〔河〕みてしより、

②もろかつら二葉ながらも君にかくあふひや神のしるしなる
 らむ〔後拾遺集卷十六、雜五、二〇六、かへし 入道前太政大
 臣・大鏡卷四、九七、上東門院彰子、「二葉ながらに」〕〔河〕
 二葉ながらに

67 かひなき身をばくまおほかみにも施し侍なん (二〇五・8・287)

身を捨てて山に入りし我なれば熊のくらはむことも覚え

ず〔拾遺集卷七、物名、三三、くまのくらといふ山寺に賀縁
 法師のやどりて侍りけるに住持し侍りける法師に歌よめと
 いひければよめる よみ人しらす・古今六帖拾遺、三三三六、
 「ことも知られず」〕〔河〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔新〕こともしられ
 ず、△弄▽、△▽〔引歌までもなきにや〕、〔休〕〔屋〕
 〔引〕〔刈〕〔事〕〔大〕〔集〕

68 はるけき山の雲かすみまじり給にしむなしき御あとに(二〇
卷5・288)

ほととぎす峰の雲にやまじりにしありとはきけど見る由も
なし(古今集卷十、物名、やまし 平あつゆき)〔河〕みる

よしもなき、△弄▽〔休〕

69 ましていまは心ぐるしきほだしもなく思ひはなれたらむを
(二〇卷3・296)

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなり
けれ(古今集卷十、雑下、壺、おなじ文字なき歌 物部
よしな)〔事〕

70 とりのねきこえぬ山にとなんまゝ侍ときこゆれば(二〇卷5・
296)

とぶ鳥の声もきこえぬおく山のふかき心を人は知らなむ
(古今集卷十、恋、三三、題しらず 読人しらず)〔紫〕

〔異〕、〔河〕〔上句ノミ〕、〔休〕〔絶〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔事〕

〔大〕

71 この夢のわたりにめとどめ給ふ(二〇卷5・297)

世の中は夢のわたりのうきはしかうち渡りつつものをこそ
思へ(未詳)〔河〕、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔休〕、〔絶〕〔引歌不合〕、
△岷▽〔湖〕〔引〕〔新〕

72 あま君もたゞふくちのそのにたねまきてとやうなりしひとこ
とを(二〇卷9・301)

① 耶輸陀羅が福地の園に種まきてあはむかならず有為の都に
(未詳)〔異〕〔河〕、〔弄〕〔細〕〔玉〕〔初句ノミ〕、〔二〕〔第二句

ノミ〕、〔休〕〔絶〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕
② この世にて菩提の種をまきつれば君が引くべき身とぞなり
ぬる(未詳)〔紫〕〔異〕

73 花みだりがはしくちるめりやさくらはよぎてこそなどの給
(二二卷9・306)

① 吹く風よ心しあらばこの春はさくららはよぎて散らざらな
む(未詳)〔釈前〕この春の…ちぢぢさくららなん、〔釈書〕ふく
風も…この春の、〔奥〕〔紫〕〔河〕吹く風も…桜をよぎて、

〔二〕〔休〕〔湖〕〔引〕〔捨〕吹く風も、〔異〕心もあらば、△細▽
〔引歌に及べからず〕、△絶▽〔引歌不及〕、〔全〕〔対〕〔事〕

〔大〕〔評〕〔集〕

② 春風は花のあたりをよぎてふけ心づからや移ろふとみむ

(古今集卷二、春下、八五、春宮のたち花の陣にて桜の花のち
るをよめる 藤原好風・古今六帖第一、春の風、三三五、藤
原好風)〔捨〕、〔新〕〔上句ノミ〕、〔大〕〔集〕

74 春のたむけのぬさぶくろにやとおぼゆ(二二卷12・307)

① 浅からぬ契りむすべる心ば手向のかみぞしるべかりける
(拾遺集卷六、雑上、四三、物へまかりける人のもとに幣を
結ぶ袋に入れて遣はすとて 能宣)〔紫〕〔異〕〔河〕△岷▽

② 我をのみ思ひつるがの越ならば帰るの山はまだはざらまし
(後撰集卷十、離別、二二六、あひしりて侍りける人のあか
らさまにこしの国へまかりけるにぬき心ざすとて 読人し
らす)〔河〕かへる山には

75 花の木にめをつけてながめやる(二二卷2・309)

起きもせず寝もせず夜を明かしては春の物とて眺め暮しつ
 (古今集卷十、恋三、六六、やよひのついたちよりしのびに
 人に物いひて後に雨のそは降りけるに詠みて遣はしける
 在原業平朝臣・伊勢物語、一、二、「ねもせて夜を」・業平集、
 一六四、「寝もせて夜を」・古今六帖第一、雨、三三三、業平、
 「寝もせて夜を」・同第三、あした、三三三、業平、「寝もせ
 で夜を」〔巻〕異「ねもせて夜を」

76 いへの風のさしも吹つたへ侍らんにのちの世のためことなる
 ことなく(二二六・310)

久方の月の桂もをるばかり家の風をもふかせてしがな(拾
 遺集卷六、雑上、四三、菅原の大臣かうぶりし侍りける夜は
 のよみ侍りける)〔河〕ふかせたらなん、〔屋〕、〔眠〕不
 及此歌なり、〔引〕新〔全〕〔対〕事〔大〕〔評〕集

77 み山木にねぐらさだむるはこ鳥もいかでか花のいろにあぐへ
 き(二二六・312)

①み山木に夜はきて鳴く箱鳥のあけは帰らむことをこそ思へ
 (古今六帖第六、はこどり、三三三)〔河〕〔休〕〔紹〕〔引〕よる
 は来てぬる、〔眠〕〔湖〕よるは来てゐる

②朝井堤に来鳴くかは鳥汝だにも君に恋ふれや時終へず鳴く
 (万葉集卷十、一八三、古今六帖第六、かほどり、三三三)〔河〕
 きなくはこどり、君にこふればときをすべなく、〔眠〕き
 なくはこ鳥、きみのこふれば時をすべなく

③かほ鳥のまなくしばなく春の野の草のね繁き恋もするかな
 (古今六帖第六、かほどり、三三三、万葉集卷十、一九六)〔花〕

〔休〕〔眠〕〔湖〕

78 かくふかき心ありけりとだにしらせてまつるべきとむねい
 たくいふせければ(二二五・313)

せりつみし昔の人や我がごとや心にものゝかなはざるらん
 (未詳)〔釈前〕

79 風にさそはれてみかきのはらをわけいりて侍しに(二二六・
 313)

①いかにせむ御垣が原に摘む芹のねにのみなけどしる人のな
 き(千載集卷十、恋一、六六、題しらず 読人しらず)〔釈
 前〕

②立ち帰り又や分けましおもかけをみかきが原の忘れがたさ
 に(未詳)〔弄〕二、「〔休〕〔紹〕〔新〕忘れがたみに、〔屋〕
 忘れがたさよ、〔眠〕〔湖〕〔拾〕

80 あやなくけふをながめくらし侍(二二八・313)

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ
 暮らさむ(古今集卷十、恋一、四六、右近のうま場のひをり
 の日むかひにたてたりける車のした簾より女の顔のほのか
 に見えければよみて遣はしける 在原業平朝臣・伊勢物語、
 一九六、大和物語、三三、業平集、一六四)〔釈前〕〔釈書〕〔異〕
 恋しきは、〔奥〕〔紫〕〔河〕、〔湖〕〔第二句〕、〔休〕
 〔紹〕〔屋〕〔眠〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕事〔大〕〔集〕

81 みもせぬといひたるところをあさましかりしみすのつまを
 (二二〇・313)

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ

若菜下

暮らさん(古今集卷十二、恋一、四六、右近のうま場のひをりの日むかひにたてたりける車のした簾より女の顔のほのかに見えければよみて遣はしける 在原業平朝臣・伊勢物語、二九六・大和物語、三三六・業平集、二二四〇)〔休〕〔紹〕〔初句、シ〕

1 ことほりとはおもへどもうれたくもいへるかな(二三三一・317) 足曳の山田のそほつおのれさへ我をほしといふうれはしき事(古今集卷十六、誹諧、三三三、題しらず 読入しらず)

つれなしがほくなむめさましよう(二三〇七・314) 〔藤原義孝集、二四六、堀川の中宮の内侍のすだれの前に物言ふほどに雨の降りかゝれば女のつげゝれば・清慎公集、三三三、堀川の中宮の内侍に物いふ頃雨のふりければ、〕雨ぞわびしき)〔河〕〔紹〕つれなしがほを：雨のわびしき

2 なぞかくことなる事なきあへしらひ許をなぐさめにてはいかゝすぐさむ(二三三一・317) ことならば思はずとやはいひ果てぬなぞ世の中の玉だすきなる(古今集卷十九、誹諧、二〇七、題しらず 読入しらず・古今六帖第五、玉だすき、三四〇三)〔紫〕〔異〕

83 いまさらに色にないでそ山さぐらをよはぬ枝に心かけきと(二三〇一〇・314) 白雲と見ゆる桜も有るものをおよばぬ枝と思はざらなむ(つつほ物語、吹上土)〔河〕〔休〕〔紹〕〔不及引歌〕、△岷▽(不用之)、〔新〕しら雲に

3 かゝる人づてならでひと事をものたまひきこゆる世ありなむ(後撰集卷十三、恋五、六、忍びてみくしげ殿のべたうにあひかたらふと聞きて父の左大臣のせいし侍りければ 敦忠朝臣・大和物語、六〇)〔捨〕〔新〕〔事〕〔大〕

この院にかゝるまるとあるべしときうつたへてれいのつどひたまふ左右大将(二三三七・317) 思ふどち田居せる夜は唐錦たゝまく惜しき物にぞありける(古今集卷十七、雑上、八四、題しらず 読入しらず・古今六帖第五、にしき、三四六、)「物にざりける」(三五)、〔岷〕(上句ノミ)

4

5 みだるゝゆふかせに花のかげいとゞたつことやすからで(二三12・318)

今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花のかげかは(古今集卷三、春下、二言、亭子院の歌合の春のはての歌 躬恒・躬恒集、一五〇〇・亭子院歌合、三五六、躬恒・和漢朗詠集卷上、春、三月尽、異、躬恒)〔釈前〕をりだにも、

〔奥〕紫〔異〕河〔入細〕休〔絶〕孟〔屋〕〔岷〕引〔全〕
〔対〕事〔入〕評

6 いづらこのみし人はとたづねてみつつけ給へり(二三2・320)
待つ人はたれならなくに時鳥思ひのほかになかばうからむ(後撰集卷四、夏、二言、題しらず、読人しらず)〔拾〕

7 これもむかしのちぎりにやとかほをみつゝ(二三13・321)
これもみなさぞなむかしの契りぞとおもふ物からあさましきかな(和泉式部統集、二言、千載集卷十、恋四、八言、題しらず、和泉式部)〔異〕河〔休〕孟〔屋〕〔湖〕これもまた、入岷〔引歌あり不及之也〕

8 たゞむかしの御ありさまにたてまつりたらむ人をみむとて(二三7・324)
河風の寒き長谷を嘆きつゝ君があるくに似る人も逢へや(万葉集卷三、四三)〔拾〕

9 あま君をばおなじくはおいのなみのしはのぶばかりに(二三8・330)

くれたけの よゝのふること なかりせば 伊香保の沼の
いかにして 思ふこゝろを のばへまし あはれ昔べ あ

りきてふ 人麿こそは うれしけれ 身は下ながら こと
の葉を 天つそらまで きこえあげ 末の世までの あと
ゝなし 今もおほせの くだれるは 塵につげとや ちり
の身に つもれることを とはるらむ これを思へば い
にしへも 葉けがせる けだものゝ 雲にはえけむ こゝ
ちして ちどの情も おもほえず 一つこゝろぞ ほこら
しき かくはあれ共 てるひかり 近きまもりの 身なり
しを たれかは秋の くるかたに 欺き出でゝ みかきよ
り 殿上もる身の みかきもり をさくしくも おもほ
えず こゝの重ねの なかにては あらしの風も きかざ
りき 今は野やまし ちかければ 春はかすみに たなび
かれ なつはうつ蟬 なきくらし 秋はしぐれに そでを
かし ふゆは霜にぞ せめらるゝ かゝる佐しき 身なが
らに つもれる年を するせれば 五つの六つに なりに
けり 是にそはれる わたくしの 老のかずさへ やよけ
れば 身は賤しくて としたかき ことの苦しき かくし
つゝ ながらの橋の ながらへて なのはの浦に たつな
みの 波のしわにや おほゝれむ さすがに命 をしけれ
ば こしの国なる しらやまの かしらは白く なりぬと
も おとはの滝の おとにきく 老ず死なずの くすりも
が 君が八千代を わかえつゝ見む(古今集卷十、雑体、
短歌、二〇三)ふる歌にくはへたてまつれる長歌 壬生忠岑
〔花〕孟〔岷〕なみのしはにやおほゝれん(二那)ミ

10 神のいがきにはふくすも色かはりて(二三14・331)

千早ぶる神の垣にはふ葛も秋にはあへず移ろひにけり

〔古今集卷五、秋下、三三〕、神の社のあたりをまかりける時

にいがきのうちの紅葉を見てよめる 貫之・古今六帖第六

くす、三三三、貫之、「色づきにけり」〔釈前〕〔奥〕〔紫〕

〔異〕もみぢしにけり、「釈書」色かはりけり、〔河〕〔一〕

〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔刈〕〔事〕〔大〕

〔評〕〔集〕

11 松の下もみぢなどをとにのみも秋をきかぬかほなり (二三三)

14・331

①もみぢせぬときはの山は吹く風の音にや秋をきく渡らむ

〔古今集卷五、秋下、三三〕、秋の歌合しける時よめる 紀淑

望・拾遺集卷三、秋、一六六、題しらず 大中臣能宣・古今六

帖第一、秋の風、三三三、紀淑望・同第三、山、三七三、紀の

よしもち・小町集、二六六、「ときはの山に」〔釈前〕いろ

かえぬ、「釈書」色かへぬときわの山に：おとにも秋をき

かぬかほなり、〔奥〕、〔紫〕ときはの山に、〔異〕色かへぬ

ときはの山に、〔河〕△弄▽〔二〕〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔刈〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②下紅葉するをばしらで松の木への緑を頼みけるかな

〔拾遺集卷五、恋三、八四〕、女のもとに遣はしける よみ人

しらす) 〔異〕しけるをしらで松のはの、〔集〕

12 もとめごはつるすゑにわかやかななるかむだちめは (二三六・七)

331

①千早振る平野の松の枝繁み千代も八千代も色はかはらじ

〔拾遺集卷五、賀、二四〕、はじめて平野祭に男使たてし時う

たふべき歌よませしに 大中臣能宣) 〔河〕ひらの松原、

〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕

②あはれ ちはやぶる 賀茂の社の 姫小松 あはれ 姫小

松 万代経とも 色は変 あはれ 色は変らじ (東遊歌、

求子歌、セ) 〔対〕

13 すみの江の松に夜ふかくをく霜は神のかけたるゆふかづらか

も たかむらの朝臣のひらの山さへとといひけるゆきのあし

たをおぼしやれば (二四〇・333)

①ゆふかづらすゑはもりくる月影のしたてる姫のやどをさす

らん (未詳) 〔異〕

②ひもろぎは神の心にうけつらし比良の高ねにゆふかづらせ

り (未詳) 〔異〕、〔河〕〔室〕ひらの山さへ、〔花〕〔二〕〔紹〕

〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕、〔引〕うけつべしひらの山さへ、〔新〕

〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

14 しもはいよくふかくてもとすゑもたどくしきまでゑひす

ぎにたるかぐらおもてども (二四四・333)

如何ばかり 良き業してか 天照るや 玉霊女の神を 暫

し留めむ (木) いづこにか 駒を繫がむ 朝日子が さす

や岡辺の 玉笹の上に 玉笹の上に (末) (神楽歌、玉霊女

歌、三、七) 〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕△岷▽

15 なを万さいくときかき葉をとりかへしつゝいはひきこゆる

御世のすゑおもひやるぞ (二四四・333)

千歳 千歳 千歳や 千歳や 千年の 千歳や 万歳 万

歳 万歳や 万歳や 万代の 万歳や (神楽歌、千歳法、
吾) [紫][異][河][二][休][紹][三][孟][岷][湖][新][全]
〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

16 千よをひとよになさまほしき夜のなにもあらであけぬれば
〔二四一・333〕

①秋の夜の千夜をひと夜になせりとともにば残りて鳥や鳴き

なむ (伊勢物語、六・続古今集卷三、恋三、二五、業平朝
臣、八千夜し寝ばやといひける返事に 読人しらす) (釈
前あきのよを…鳥やなきてん、(奥)[紫]、(異)鳥や鳴
くらん、〔河〕〔八〕〔V〕〔紹〕〔孟〕、△岷V(私不用之、〔湖〕
〔引〕、〔新〕〔上旬ノミ〕、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

②秋の夜の千夜を一夜になすらへて八千夜し寝ばや飽く時の
あらむ (伊勢物語、六・古今六帖第四、恋、三三〇)、「恋は
醒めなむ」(休)

17 さらぬ世をみはてぬさきに心とそむきにしがなと (二四〇・
335)

あかだこそ思はむ中は離れなめそをだに後の忘れ形見に
(古今集卷十四、恋四、七、題しらす 読人しらす・古今六
帖第三、かたみ、三三四、「別れなめ」(休)

18 たそがれ時のそらに花はこそぞふる雪思いでられて (二五〇
13・343)

梅の花それとも見えず久方のあまぎる雪のなべてふれよば
(古今集卷六、冬、三四、題しらす 読人しらす) (細)(新)
(下旬ノミ)

19 うぐひすさそふつまにしつべくいみじきおとりのあたりに

ほひ也 (二五一・344)

花の香を風のたよりにたぐへてぞ驚誘ふしるべにはやる
(古今集卷二、春上、三、寛平の御時きさいの宮の歌合の歌
紀友則・古今六帖第二、のこりの雪、三三〇、友則、「しる
べにはする」・同第一、春の風、三三三、友則・同第六、うぐ
ひす、三三三、とものり・寛平御時后宮歌合、三三三、紀友
則・友則集、二四六、寛平の御時の歌合、初春) (釈前)

〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔二〕〔第二旬ノミ〕、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕
〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

20 二月の中十日許のあをやきのわづかにしだりはじめたらむ心
ちしてうぐひすのはかせにもみだれぬべくあえかにもえ給
(二五十四・346)

鶯の羽かせになびく青柳のみだれて物を思ふころかな (未
詳) (河)〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕

21 ふちの花の夏にかゝりてかたはらにならぶ花なきあさばらけ
の心ち (二五五・346)

夏にこそ咲きかゝりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな
(拾遺集卷三、夏、三、百首の歌の中に 重之・源重之集、
一九七) (休)

22 花といはゞさくらにたとへてもなをものよりすぐれたるけは
ひ (二五十四・347)

桜よる優る花なき春なればあだし草木を物とやはみる (貫
之集、二四六、延喜十年十月十四日女八宮陽成院の一のみ
この四十の賀仕うまつる時の屏風のうたてうぜさせ給ふ仰

せにて仕うまつる・古今六帖第六、さくら、三五〇六「桜より…あだし草葉を」〔河〕〔孟〕桜より…あだし草木は物ならなくに、〔岷〕桜より…あだし草木は物ならなくに〔私不及此歌〕、〔湖〕桜より…あたら草木の物ならなくに
 23 さままつ花たちはなのはなもみもぐしてをしおれるかほりおぼゆ〔二語7・347〕

① 橋は実さへ花さへその葉さへ枝に霜ふれましてときは木〔古今六帖第六、たちばな、三五〇三、家持集、一五〇五、冬歌、〕
 「枝に霜ふれどいや常葉の木」・万葉集卷六、二〇〇六、御製、
 「枝に霜降れどいや常葉の樹」〔河〕枝に霜をけとましときはの木〔真本まじるときはにして〕、〔岷〕枝に霜おけいましときは木、〔引〕枝に霜をけとましときはの木、〔事〕

② さつきまつはな橋の香をかげば昔の人の袖の香ぞする〔古今集卷三、夏、二五、題しらず、読人しらず・古今六帖第六、橋、三五〇六、いせ・伊勢物語、二五〇、和漢朗詠集卷上、夏、花橋、二五〕〔花〕〔休〕△紹▽〔孟〕〔岷〕、〔新〕〔第二句ノミ〕、〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

24 秋のあはれはたかうやうなるものゝねにむしのこゑよりあはせたるたゞならず〔二五五5・348〕

① より合はせて泣くなる声を糸にして我が涙をば玉にぬかなむ〔伊勢集、二二三六〕〔拾〕〔大〕
 ② 緒をよりてかひなき物は落ち積もる涙の玉をぬかぬなりけり〔土佐日記、三三〕〔大〕

25 春のそらたどくしきかすみのまよりおぼろなる月かげに

〔二五五9・348〕

やま桜霞のまよりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ〔古今集卷十一、恋、四六、人の花つみしける所にまかりてそこなりける人のもとに後によみてつかはしける 貫之〕

26 いにしへより人のわきかねたることをすゑの世に〔二五五13・349〕

① 昔よりいひしきにける事なれば我らはいかゞ今は定めむ〔拾遺集卷六、雑下、三六、こたふ 躬恒〕〔河〕いひしをきたる〔不本真本いひをきたる〕、〔休〕〔孟〕いひしをきたる、〔岷〕〔私此引歌いかゞ〕

② 春秋におもひ乱れてわきかねつ時につけつゝうつる心は〔拾遺集卷六、雑下、三六、ある所に春秋いづれまさるとはせ給ひけるによみて奉りける 貫之・貫之集、一八〇〕、ある所に春と秋といづれか優れると問はせ給ひけるに詠みて奉りける〕〔岷〕

27 かつらぎあそび給はなやかにおもしろし〔二五五13・353〕

葛城の 寺の前なるや 豊浦の寺の 西なるや 榎の葉井に 白壁沈くや 真白壁沈くや おおしとんど おおしとんど しかしては 国ぞ栄えむや 我家らぞ 富みせむや おおしとんど としとんど おおしとんど としとんど 〔催馬楽、葛城、三三〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

28 つるによるかたありてこそあめれ〔二五六6・352〕

① よるかたもありといふなるありそ海のたつしら浪もおなし心よ〔未詳〕〔釈前〕、〔奥〕〔紫〕〔異〕おなし所に、〔河〕よるかたの〔真本〕：おなし所に、〔休〕、〔孟〕たつ白波のおなし心に、〔岷〕〔湖〕〔拾〕たつ白波のおなし所に

② 大ぬきと名にこそ立てれ流れても終によるせはありてふものを〔古今集卷十四、恋四、七五、返し〕業平朝臣・伊勢物語、〔四〕「ありといふものを」・業平集、一六四四〔河〕〔紹〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔事〕〔評〕〔集〕

③ 渡津海の沖つ潮合に浮かぶ沫の消えぬ物からよる方もなし〔古今集卷十七、雑上、九〇、題しらず〕読人しらず・古今六帖第三、しほ、三三四四、「絶ぬものから」〔河〕あはれいづくに〔第四包〕、〔岷〕

29 御身もぬるみて御心ちもいとあしけれど〔二六六・三六三〕

人知れぬわれが思ひに逢はぬまはみさへぬるみて思ほゆるかな〔小町集、一六五〕〔河〕〔休〕〔紹〕わが思ふ人にあはぬ夜は、〔孟〕〔岷〕〔引〕あはぬ夜は、〔湖〕、〔新〕われが思ひにあはぬよは、〔大〕〔集〕

30 ながさめがたきをばすてにて人めにとがめらるまじきばかりに〔二五七・三六六〕

我が心ながさめかねつ更科やをばすて山にてる月を見て〔古今集卷十七、雑上、九六、題しらず〕読人しらず・古今六帖第一、雑の月、三二六・大和物語、セ二〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔二〕〔新〕〔上句ノミ〕、△細▽〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

31 このごろこそすこし物くしく御ぞの色もふかくなり給へれど〔二四二・三六八〕

思ひきやきみが衣をぬぎかへてこき紫のいろをきむとは〔後撰集卷十五、雑二、二三、庶明朝臣中納言になり侍りける時うへのきぬつかはすとて〕右大臣〔河〕〔岷〕

32 女御さききもあるやうありてものしたまふたぐひなくやは〔二四九・三六九〕

わびぬれば今はた同じ難波なるみを尽くしても逢はむとぞ思ふ〔後撰集卷十五、恋五、六六、事いできて後に京極の御息所につかはしける〕元良親王・拾遺集卷十五、恋三、七六・古今六帖第三、みをつくし、三三三・元良親王集、三三四四〔河〕〔孟〕〔岷〕

33 世中はいとつねなき物をひとときはに思ひさだめてはしたなく〔二四四・三六九〕

恋ひ死なばたが名はたゞじ世の中の常なきものと言ひはなすとも〔古今集卷十五、恋三、六三、題しらず〕深養父〔釈前〕〔紫〕〔異〕たがなかおしき、〔奥〕〔河〕〔孟〕、〔岷〕私此引うたに及ばず、〔引〕〔事〕

34 かずにもあらずあやしきなれすがたをうちとけて〔二五七・三七〇〕

① 是をみよ人もすさめぬ恋すとて音を泣く虫のなれる姿を〔後撰集卷十一、恋三、五四、物いひける女の蟬のもぬけを包みてつかはすとて〕源重光朝臣〔釈前〕人もとがめぬ、〔釈書〕人に知られぬ：ねになくむしの、〔紫〕〔異〕人もと

がめぬ：なれる姿よ、〔弄〕〔岷〕〔初句ノミ〕

②君が門今ぞ過ぎ行く出でて見よ恋する人のなれる姿を〔住吉物語〕〔岷〕

35 いうちもくゝゐてかくしたてまつりてわが身もよにふるさまならず〔二六九・373〕

白玉か何ぞと人の問ひし時露とこたへて消えなまし物を〔伊勢物語、三・新古今集卷六、哀傷、五〕題しらず 在原業平朝臣〔岷〕〔上句ノミ〕

36 わが身もよにふるさまならずあとたえてやみなば〔二六九・373〕

花の色は移りにけりないたづらに我が身世にふるながめせしまに〔古今集卷二、春下、二三〕題しらず 小野小町〔集〕

37 さらばふようなめり身をいたづらにやはなしはてぬ〔二六九・375〕

夏虫のみをいたづらになす事も一つ思ひによりてなりけり〔古今集卷十、恋二、五四〕題しらず 読入しらず・古今六帖第六、夏虫、五三三三〔河〕〔五〕〔岷〕〔第二句ノミ〕不及 此歌、〔引〕〔拾〕〔余〕

38 つゆにても御心ゆるしたまふさまなどはそれにかへつるにても〔二七九・375〕

命やは何ぞは露のあだ物をあふにしかへば惜しからなくに〔古今集卷十、恋三、六五〕題しらず 友則〔新〕のどかならずたちいづるあけくれ秋のそらよりも心づくし也

〔二二〇・376〕

木の間よりもりくる月の影見れば心づくしの秋は来にけり〔古今集卷四、秋上、一八四〕題しらず 読入しらず・古今六帖第一、秋の月、三二七〔紹〕〔引〕〔拾〕〔事〕〔評〕〔集〕

40 おきてゆく空もしられぬあけくれにいづくの露のかゝる袖なりとひきいでうれへきこゆれば〔二〇九・376〕

①明け暮の空にぞわれはまよひぬる思ふ心のゆかぬまにく〔拾遺集卷十、恋三、五八〕女のもとよりくらきに帰して遣はしける 順〔業〕まどひぬる：ゆかぬまにく、〔事〕

②おきて行くかたもしられぬまよふかな涙も袖もめにさはりつゝ〔未詳〕〔河〕〔休〕〔五〕〔岷〕〔第二句ノミ〕

③涙川ながす寝覚もあるものを払ふばかりのつゆやなになり〔後撰集卷十、恋三、七三〕かへし 読入しらず〔弄〕〔二〕

④思ひ出でうおとづれしける山彦の答へにこりぬ心なになり〔後撰集卷十、恋四、八七〕あさたらの朝臣久しう音もせで文おこせて侍りければ 読入しらず〔弄〕をとづれしけん：こたへによりぬ、〔二〕〔細〕〔紹〕〔五〕〔岷〕〔湖〕をとづれしけん、〔休〕

⑤こひしきも思ひこめつゝある物を人にしらるゝ涙なになり〔後撰集卷十、恋三、七三〕題しらず 平中興〔休〕

⑥小夜深み帰りし空もなかりしをいづこより置く露にかあるらん〔元輔集、一五五〕人の許より帰りまできて又の日遣しはべりし〔拾〕、〔新〕さ夜更で、〔大〕

⑦見るからに袂ぞぬる、桜花空より外の露やおくらむ（清慎
公集、三三六、同年二月二十八日看旧庭難仰悲恋・続古今
集卷十六、哀傷、一四〇）、女御述子かくれての春、花を見て
清慎公・新千載集卷十六、哀傷、三六〇、女御失せ給うての頃
小野宮右大臣）〔拾〕〔大〕

⑧ゆきやらぬ夢路に惑ふ袂には天津空なき露ぞおきける（後
撰集卷十、恋一、五〇、題しらず 読人しらず）〔新〕

41 あげぐれの空にうきみはきえな、ん夢なりけりとみてもやむ
べく（二〇二・三〇六）

こむ世にも早なりな、むめの前につれなき人を昔と思はむ
（古今集卷十一、恋一、三〇、題しらず 読人しらず・古今六
帖第五、こむよ、三九七）〔新〕

42 いでぬるたましひはまことに身をはなれてとまりぬる心ちす
（二〇二・三〇六）

あかざりし袖のなかにや入りにけむ我が魂のなき心地する
（古今集卷十六、雑下、三三、女ともだちと物語して別れて後
につかはしける みちのく）〔河〕、（一）袖のうちにや、

〔休〕〔紹〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔対〕〔大〕

43 めもあはずみつるゆめのさだかにあはむこともかたきをさへ
思ふに（二〇二・三〇六）

むば玉の闇のうつつは定かなる夢にいくらもまさらざりけ
り（古今集卷十三、恋三、六四、題しらず 読人しらず・古今
六帖第四、片恋、三六六、うは玉の）〔大〕

44 斎宮におはしまし、ころほひの御つみかるむべからむくどく

の事を（二〇七・三〇二）

思へども思むとていはぬ事なればそなたに向きて音をのみ
ぞなく（詞花集卷十、雑下、四六、加茂のいつきときこえけ
る時に西にむかひてよめる 選子内親王）〔河〕〔紹〕〔孟〕
〔眠〕

45 なにをさくらにといふふる事もあるは（二〇九・三〇三）

まてといふにちらでしとまるものならば何を桜に思ひまさ
まし（古今集卷三、春下、五、題しらず 読人しらず・古
今六帖第六、さくら、三四〇、素性・素性法師集、二五〇、

山の桜を見て）〔釈前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔初句ノミ〕、
〔二〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕
〔大〕〔集〕

46 なにかうき世にひさしかるべきとうちずしひとりごちて（二
〇七・三〇四）

①残りなく散るぞめでたき桜花ありて世の中はてのうければ
（古今集卷三、春下、七、題しらず 読人しらず）〔釈前〕
なごりなく、〔奥〕〔紫〕、〔異〕〔紹〕なにかうき世に久しか
るべき、〔河〕、〔眠〕〔第二句ノミ〕

②散ればこそいと、桜はめでたけれ浮き世に何か久しかるべ
き（伊勢物語、二六）〔異〕ありて世の中はてのうければ、

〔弄〕〔休〕〔第二句ノミ〕、〔二〕、〔孟〕〔屋〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔新〕
何かうき世に、〔全〕〔事〕〔大〕〔集〕

47 なべての世中いとほしく（二〇九・三〇五）

大方のわが身一つの憂きからになべての世をも恨みつるか

な〔後撰集卷七、雑三、三三三、題しらず、読人しらず・拾遺集卷五、恋三、九三三、題しらず、貫之〕〔紫〕〔異〕

48 あをみおとろへたまへるしもいろはさをにしろくうつくしげに〔二五二・387〕

人魂のさ青なる公がただ独り逢へりし雨夜の墓し念はゆ〔万葉集卷十六、三九六〕〔河〕あひしあま夜は眞本あまよのひ

さしとぞ思

49 池はいとすゞしげにてはちすの花のさきわたれるにはいとおをやかに：契をかむこの世ならでもはちすばに玉あるつゆのこころへだつな〔二五四・388〕

はちす葉の濁りにしまぬ心もて何かは露を玉とあざむく

〔古今集卷三、夏、一六六、蓮の露を見てよめる、僧正遍昭・遍昭集、一八六、はちすに露のおきたるを、〕などかは露を〔古今六帖第六、はちす、三三三、元、ヘンせう・和漢朗詠集卷上、夏、蓮、一八二〕〔紫〕〔異〕〔事〕〔評〕〔集〕

50 かれみたまへをのれひとりもすゞしげなるかなとのたまふに〔二五五・388〕

思ひには我こそ入りて惑はるれあやなく君や涼しかるべき〔後撰集卷十一、恋三、院のやまとに扇遣はすとて、右大臣〕〔拾〕

51 さらばみちたどくしからぬ程にとて御ぞなどたてまつりなをす月まちてともいふなる物をと〔二五九・391〕

夕闇は道たどくし月待ちて帰れわがせこそその間にも見む〔古今六帖第一、夕やみ、三三三、大宅娘女・伊勢集、一六六、

「夕されば」・万葉集卷七、七六、豊前国の娘子大宅女〔釈

前〕いまをわがせこ、〔釈書〕、〔奥〕〔新〕ゆふぐれば、〔紫〕

〔異〕〔河〕、〔二〕〔上句ノミ〕、〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔引〕

〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

52 夕露に袖ぬらせとやひぐらしのなくをきくくおきて行らむ〔二五九・391〕

唐衣たつ日はきかじ朝露のおきてしゆけばけぬべき物を

〔古今集卷八、離別、三三三、題しらず、読人しらず〕〔河〕、

〔休〕〔孟〕白露の

53 まつ里もいかゞきくらんかたぐくに心さはがすひぐらしのこゑ〔二五九・391〕

こめやとは思ふものからひぐらしの鳴ぐ夕暮は立ちまたれ

つゝ〔古今集卷五、恋三、題しらず、読人しらず〕

〔岷〕〔湖〕〔新〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

54 心ざしふかきわたくしのねぎごとになびき〔二五九・395〕

ねぎ言をさのみ聞きけむやしうこそ果ては歎きの森となる

らめ〔古今集卷六、雑体、誹諧、三三三、題しらず、さぬき

〔河〕〔杜〕となりけれ、〔孟〕〔事〕〔評〕

55 恋の山ぢはえもどくまじき御心まじりける〔二五九・396〕

いかばかり恋てふ山の深ければ入りと入りぬる人感ふらむ

〔古今六帖第四、恋、三三三〕〔奥〕〔異〕〔河〕〔事〕〔岷〕〔引〕

〔新〕恋の山路のしげれば、〔紫〕恋の山ぢのしげれば

いりぬる、〔二〕〔休〕恋の山ぢのしげればいると入りぬる人まよふらん、〔紹〕〔孟〕〔屋〕恋の山路のしげれば入

ると入りぬる、〔湖〕恋の山路のしげゝれば：人まよふらん、〔全〕〔対〕〔入〕〔評〕〔集〕

56 あさゆふすゞみもなきころなれど身もしむる心ちして 〔三〇〕
5・398)

①夏の日も朝夕涼みあるものをなどわが恋のひまなかるらむ
〔未詳〕、〔秋前〕、〔奥〕〔休〕夏の日、〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕
〔上句ノミ〕、〔二〕〔絶〕〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔全〕
〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

②夏草もよの間は露にはらふらし常にこがるゝわれぞ悲しき
〔新撰万葉集巻下、夏、三〕〔拾〕〔新〕

57 身のいたづらになりぬる心ちすれば 〔三〇〕12・399)

哀ともいふべき人はおもほえて身のいたづらになりぬべき
かな 〔拾遺集巻十五、恋五、五〕、物いひ侍りける女の後にっ
れなく侍りて更にあはず侍りければ 一条撰政 〔河〕〔休〕
〔絶〕〔孟〕〔引〕

58 こまやかなる事おぼしめてゝし世なれどなをこのみちははな
れがたくて 〔三〇〕5・405)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな
〔後撰集巻五、雑、二〕、太政大臣の左大将にてすまひの
かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ
れかれ罷りあかれけるにやんごとなき人 二三人ばかりとゞ
めてまらうどあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のう
へなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、親、
三三七、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、二六六、

子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言 〔評〕〔集〕

59 かくとしもせめつればえ思ひのごとくしあへで 〔三三〕13・411)

頼めつゝ別れし人を待つ程に年さへせめて恨めしきかな
〔拾遺集巻十六、雑恋、二〕、年のをはりに人まち侍りける
人のよみ侍りける 貫之 〔拾〕

60 雪のたゞいさゝかちるに春のとなりちかく 〔三三〕8・414)

冬ながら春のとりの近ければ中垣よりぞ花はちりける
〔古今集巻十六、雑体、誹諧、三〕、明日春立たむとしける
日隣の家の方より風の雪を吹きこしけるを見て其隣へ詠み
て遣しける 清原深養父・古今六帖第二、まがき、三三〇、
深養父、「花は咲きける」 〔秋前〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔二〕

〔休〕〔絶〕〔孟〕〔屋〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕
61 むめのけしきみるかひありてほゝゑみたり 〔三三〕8・414)

句はねどほほゑむ梅の花をこそ我もをかしと折りてながむ
れ 曾丹集、三三〇、〔異〕〔河〕〔孟〕〔絶〕〔事〕〔評〕

62 すぐるよはひにそへてはゑひなきこそとゞめがたきわざなり
けれ 〔三三〕9・415)

①賢しきと物いふよりは酒飲みて酔泣きするしまさりたるら
し 〔万葉集巻三、三〕、大宰帥大伴卿 〔河〕〔休〕〔絶〕〔孟〕
〔絶〕かしこしといふ物よりもゑひなきするぞましてあ
らし

②黙然をりて賢しらすは酒飲みて酔泣きするになほ若かず
けり 〔万葉集巻三、三三〕、大宰帥大伴卿 〔河〕たゞにるて
かたらひするは猶しかずなり、〔孟〕たゞにるてかたら

ひするは…猶しりぞけり、〔岷〕たゞにゐてかたらひするは

③世のなかの遊びの道にせずしくは酔泣きするにあるべからし〔万葉集卷三、三〇、大宰帥大伴卿〕〔河〕まじらはゞ

ゑひなきするとあかぬ人も〔真本ぞあかぬなるべし〕、〔孟〕まじらはゞゑひなきするとあかぬへかみし、〔岷〕まじらはゞ…ありぬなるべし

④古の七の賢しき人どもも欲りせしものは酒にしあるらし

〔万葉集卷三、三〇、大宰帥大伴卿〕〔岷〕

63 あるじの院すぐるよはひにそへてはゑひなきこそとめがたきわざなりけれ…ざりともいましばしならんさかさまにゆかぬとし月よおいはえのがれぬわざ也〔三三九・415〕

逆さまに年もゆかなむ取りもあへず過ぐる齡やともに返ると〔古今集卷七、雑上、六六、題しらす 読人しらす〕

〔業〕、〔異〕恋もゆかなむ、〔河〕〔休〕〔絶〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕

64 ことなくてすぐすべきひ比は心のどかにあいなのだのみして〔三二九・416〕

いたづらにすぐる月ひはおもほえて花見てくらす春ぞすくなき〔古今集卷七、賀、三三、さだやすのみこのきさいのみやの五十賀奉りける御屏風に桜の花のちる下に人の花見たるかたかけるをよめる 藤原興風・興風集、一六九、貞保の親王の後の五十賀奉り給ひけるに御屏風の絵に桜の花見たる所、「おほかれど」〕〔新〕大かたに〔初包〕

65 いまはとわかれたてまつるべきかどでにやとおもふは〔三二一〇・416〕

かり初めの行きかひちとぞ思ひこし今はかぎりの門出なりけり〔古今集卷七、哀傷、六三、甲斐の国にあひ知りて侍りける人とおらはむとてまかりける道なかにてにはかに病ひをしていまいとなりにければよみて京にもてまかりて母に見せよといひて人につけ侍りける歌 在原滋春・大和物語、六三、「思ひしを」〕〔休〕、〔絶〕別れにし〔第三包〕、

〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕

66 かのおはします御てらにもまかびるさなの〔三三四・418〕吹きまよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の〔古今集卷七、恋、六二、題しらす 雲林院のみこ〕〔絶〕

〔湖〕

柏木

1 すべての中すさまじうおもひなりて (二三〇七・11)

大方のわが身ひとつの憂きからなべての世をもうらみつ
るかな (後撰集卷七、雜三、二三三、題しらず、読人しらず、

「あすか川(初句)・淵瀬故(第三句)」。拾遺集卷五、恋三、五三、
題しらず、貫之(紫)(異)(河)(休)(細)(孟)(屋)(岷)(湖)

〔引〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

2 の山にもあくがれむみちのをもきほだしなるべくおぼえしか
ば (二三〇八・11)

① いづくにか世をば厭はむ心こそ野にも山にも惑ふべらなれ
(古今集卷十、雜下、五七、題しらず、素性・素性法師集、

一五三(河)(休)(細)(孟)(岷)(湖)(新)(大)(新)(集)

② いく迄か野へに心のあくがれむ花し散らずは千代も経ぬべ
し (古今集卷三、春下、六、春の歌としてよめる、素性)

〔河〕〔孟〕〔湖〕

③ 世の憂き見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなり
けれ (古今集卷六、雜下、五五、おなじ文字なき歌、物部

よしな(河)(新)(事)(評)(集)

④ み狩する駒のつまじく青つらら君こそ我はほだしなりけれ
(拾遺集卷十、雜恋、二三四、題しらず、読人しらず)(河)

〔孟〕

3 たれもちとせのまつならぬ世はつるにとまるべきにもあらぬ

を (二三一三・12)

憂くも世に思ふ心にかなはぬか誰も千年の松ならなくに
(古今六帖第四、うらみ、三五四)〔釈前〕〔紫〕〔河〕〔心〕

物の、〔釈書〕心に物のかなはねど…松ならぬ世に、〔奥〕
うくも世の、〔異〕かくも世の心にももの…松ならぬよ

に、〔弄〕、〔休〕〔細〕〔引〕〔拾〕心に物のかなはぬは、
〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

4 ひとつおもひにもえぬるしにはせめ (二三六一・12)

夏虫の身をいたづらになすこともひとつ思ひによりてな
りけり (古今集卷十、恋二、五四、題しらず、読人しらず、

古今六帖第六、夏虫、三五三)〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕

〔河〕、〔孟〕(第二句ノミ)、〔一〕〔細〕〔休〕〔細〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕
〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

5 枕もうきぬ許人やりならずながしそへつゝ (二三二七・12)

① 涙川枕ながるゝうきねには夢も定かに見えずぞありける
(古今集卷十、恋一、五三、題しらず、読人しらず)(紫)

〔異〕〔河〕〔休〕〔細〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔余〕〔評〕〔集〕

② 人恋ひてぬる春の夜はしきたへの枕覺めに流れ出でぬべ
し (古今六帖第三、まくら、三〇六)(余)

③ ひとり寝の床にたまれる涙には石の枕も浮きぬべらなり
(古今六帖第三、まくら、三〇七)(余)

6 いまはとてもえむけぶりもむすはくれたえぬおもひの猶やの
こらむ (二三一三・13)

① むすはれもえんけぶりをいかせん君だにこめよながき

契りを〔未詳〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕、△紹▽〔引歌不及敷〕、
〔峴〕、〔引〕君だにとめよ

②この世をも後をもいかにいかにせん燃えむ煙のむすばれ
つゝ未詳〔河〕〔孟〕〔峴〕

7 心のどめて人やりならぬやみにまどはむみちのひかりにもし
侍らむ〔三六〕14・18

人やりの道ならなくに大方はいきうしといひていざ帰りな
む〔古今集卷六、離別、三六〕山ざきより神なびの森まで送
りに人々まかりて帰りがてにして別れ惜みけるによめる
源さね〔紫〕〔異〕〔河〕、〔孟〕いざかへりこん、〔事〕

8 こりすまにあはれなること々もを〔三三〕1・13

こりすまに又もなき名は立ちぬべし人にくからぬ世にし住
まへば〔古今集卷十三、恋三、三三〕題しらず 読人しらず

〔紫〕、〔異〕又もうき名は、〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔事〕

9 我もけふかあすかの心地して物心ばそければ〔三三〕5・13

人の身の老をはてにしせましかばけふかあすかと急がざら
まし〔朝忠集、一五六、世の中騒がしき頃〕〔釈前〕〔異〕

〔河〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔峴〕人のよの…けふかあすかも、〔奥〕
〔紫〕人の世を…けふかあすかも、〔引〕人のよの…なげか
ざらまし

10 そはかとなくものを心ばそく思てねをのみ時くなき給

〔三三〕1・14

神無月風に紅葉の散る時はそはかとなく物ぞ悲しき〔高
光集、一五三、十月九日冷泉院の釣殿にて神無月といふこ

とをかみに置きて歌よませ給ふに・新古今集卷六、冬、五二、
天曆の御時神無月といふ事をかみにおきて歌つかうまつり
けるに〔藤原たかみつ〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕

11 さるまじきあやまちをひきいでゝ人の御なをもたて身をもか
へりみぬたくひむかしの世にもなくやはありけると〔三三〕

1・15

あまのかる藻に住む虫の我からとねをこそなかも世をばう
らみじ〔古今集卷五、恋三、八三〕題しらず 典侍藤原直子
朝臣・伊勢物語、二三・古今六帖第三、われから、三三三三

〔河〕〔孟〕〔峴〕

12 まどひそめにしましたましひの身にもかへらずなりにしをかの院
のうちにあくがれありかばむすびとどめたまへよ〔三三〕6・

15

①思ひ余り出でにし魂のあるならむ夜深く見えば魂結びせよ
〔伊勢物語、三三〕〔釈前〕なげきあまり…むすびとどめよ、

〔釈書〕〔奥〕なげきわび…むすびとどめよ、〔紫〕〔全〕なげ
きわび、〔異〕なげきわび…夜ふかく見えね、〔河〕〔孟〕
〔峴〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔大〕〔集〕

②魂は見つ主は誰とも知らねども結びとどめよしたかひのつ
ま未詳〔異〕下がへのつまにむすびとどめよ、〔孟〕〔湖〕

〔事〕〔大〕

③恋わびてよるくまどふわが玉はなかく身にもかへらぬ

りけり〔未詳〕〔異〕〔河〕、〔休〕わが玉も、〔紹〕〔孟〕〔峴〕
〔湖〕〔引〕、〔拾〕よなくくまどふ、〔全〕〔対〕

13 いとよはげにからのやうなるさましてなきみわらひみかたら
ひ給(二三・7・16)

うつ蟬はからを見つゝもなぐさめつ深草の山煙だにたて

(古今集卷十、哀傷、三、堀川のおほきおほいまうち君身
まかりにける時に深草の山にをさめてける後に詠みける

14 いかなるむかしのちぎりにていとかくることしも心にしみけ
むとなくくゝぬざりいり給ぬれば(二三・17)

別れてふことは色にもあらなくに心にしみてわびしかるら
ん(古今集卷六、離別、三六、人に別れる時によみける
貫之)(紫)(異)(河)(孟)

15 わが世とゞもにおそろしと思しことのみくひなめり(二三
3・19)

思ひけむ人をぞ友に思はましましや報ひなかりけりやは
(古今集卷十、雑体、誹諧、二四、題しらず 深養父)
(紫)、(異)心ぞとも

16 このごろはなにごともおぼされてをほぞうの御とぶらひのみ
ぞありける(二三・14・19)

ちちといへばおほるふなりし風にいであつては問はむあた
ら名を立てよ(蜻蛉日記、二三)(拾)おほぞふなりし

17 あるまじきことはおほしめしなからよにかくれていでさせ
たまへり(二三・9・22)

よに隠れきつるかひなく紅葉はも月に赤くぞ照りまさりけ
る(貫之集、二五三、延長六年中宮の御屏風の歌四首右近

衛中将うけ給はりて・古今六帖第一、秋の月、三六、「紅
葉はの月は明くも照り増る哉」(拾)、(新)もみぢ葉の月
にあかくも

18 なをまどひさめがたきものはこのみちのやみになむ侍りけれ
ば(二三・12・22)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな
(後撰集卷十、雑、二四、太政大臣の左大将にてすまひの
かへりあるじ侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ
れかれ罷りあかれるにやんごとなき人三人ばかりとゞ
めてまらうとあるじ酒あまたゝびの後酔にのりて子供のお
へなど申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第二、親、

三三三、「迷ひぬるかな」・大和物語、五二・兼輔集、二六六、
子の悲しきことを集りて云ひければ、中納言(紫)(異)
(河)(休)(紹)(至)(湖)(引)(対)(事)(大)(評)(集)

19 もしをくれさきたつみちのだうりのまゝならでわかれなば
(二三・13・23)

末の露もとの雫や世の中の後れ先だつためしなるらむ(古
今六帖第一、雫、三四〇・遍昭集、二六六、世のはかなさい
とゞ思ひしられて侍りしかば・和漢朗詠集卷下、無常、
五六、良僧正(紫)(異)、(休)第二句ノミ、(紹)(引)(対)

20 などかいくばくも待まじき身をふりすてゝかうはおほしなり
にける(二三・5・26)

幾世しもあらじわが身をなぞもかくあまのかるもに思ひ乱

る、〔古今集卷十六、雑下、三〇〕題しらず 読人しらず。
〔古今六帖第三、藻、三三〇〕〔河〕〔孟〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕

〔事〕

21 又しる人もなくてたゞよはむことのあはれにさがたう〔三
四・八・27〕

枕よりまた知る人もなき恋を涙せきあへずもらしつる哉

〔古今集卷十三、恋三、六〇〕題しらず 平貞文・古今六帖第三
まくら、三〇七〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕

22 心よりほかなるいのちなればたへぬちぎりうらめしうて〔三
四・五・29〕

命だに心にかなふものならば何か別れのかなしからまし

〔古今集卷六、離別、三六〕源のさねがつくしへ湯あみむと
て罷りける時に山崎にて別れ惜みける所にてよめる しろ
め・古今六帖第四、別、三三〇三・大和物語、六五・和漢朗詠

集卷下、餞別、四〇〔集〕

23 をくれさきたつへだてなくとこそちぎりきこえしが〔二四
10・32〕

末の露もとの雫や世の中の後れ先だつためしなるらむ〔古
今六帖第一、雫、三三〇〕暹昭集、二六七九、世のはかなさ

とと思ひしられ侍りしかば・和漢朗詠集卷下、無常、九六、
良僧正〔紫〕、〔異〕〔第二句ノミ〕、〔河〕〔孟〕〔岷〕〔事〕〔評〕

24 いまはいふかひなしやとてとりかへさまほしうかなしくおほ
さる〔二四一〇・34〕

とり返すものにもがなや世の中をありしながらのわが身と

思はむ〔未詳〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕
いとかうけふあすとしもやと身づからながらしらぬいのち
のほどを〔二四七二・34〕

遂に行く道とは兼て聞きしかど昨日けふとは思はざりしを
〔古今集卷十六、哀傷、八六〕病ひして弱くなりける時よめ
る 業平朝臣・伊勢物語、三三三・大和物語、七三・業平集、
一七〇七〔紫前〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔一〕〔湖〕〔新〕〔上句ノミ〕、
〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

26 やむくすりならねばかひなきわざになむありける〔二四九
35〕

我こそや見ぬ人こふる病すれあふ日ならではやむ薬なし
〔拾遺集卷十一、恋一、六三〕題しらず 読人しらず〔紫前〕
〔奥〕〔紫〕〔異〕くせつけれあふよりほかの、〔積書〕我こそ
は…くせつけれあふよりほかの、〔河〕くせつけれ逢ふよ
り外に、〔弄〕〔初句ノミ〕、〔休〕我こそは…くせつけれあふ
より外に、〔紹〕我こそは…病なれあふより外に、〔孟〕わ
れこそは…あふより外は、〔岷〕われこそは…あふひなら
ねば、〔新〕我こそは…あふより外に、〔湖〕我こそは、
〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

27 あわのきえいるやうにてうせ給ぬ〔二四一〇・35〕

①水の泡のきえて憂き身といひながら流れてなほも頼まる
かな〔古今集卷十五、恋三、七五〕題しらず 友則・古今六帖
第四、うらみ、三九九、伊勢、「消えて浮き世と知りながら
流れてもなほ」・同第四、雑の思、三〇三三、「思へども」・友

則、うらみ、三九九、伊勢、「消えて浮き世と知りながら
流れてもなほ」・同第四、雑の思、三〇三三、「思へども」・友

則集、〔五〕「知りながら」〔紫〕〔異〕〔河〕きえてうきよ
としりながらかゝりて猶も、〔孟〕〔湖〕うき身と知りなが
ら、〔事〕〔集〕

②憂きながら消えせぬ物は身なりけりうらやましきは水の泡
かな〔拾遺集〕卷三、哀傷、二三、うまごに後れ侍りて中
務〔河〕

28 おとよきたのかたなどはましていはむかたなくわれこそさき
だゝめ〔三〕〔五〕2・35

まだしらぬ人も有りけり東路に我も行きぞすむべかりけ
る〔後撰集〕卷三、哀傷、二三、敦敏が身まかりにけるをま
ださかであづまより馬を送りて侍りければ 左大臣・栄花
物語、月の宴、三〇、藤原実頼・大鏡卷、二〇、清慎公集、
三三、敦敏亡逝之後不知其由從関東有送馬之不
堪悲涙聊述所懷〔花〕〔絶〕〔孟〕〔岷〕

29 御いかにちのまいらせたまはむとて〔三〕〔五〕13・36

①ひととせにこよひ数ふる今よりは百歳までの月影を見む
〔大鏡〕卷一、二七、藤原伊衡〔河〕も、年までの、〔孟〕〔岷〕
②祝ひつる言だまならば百年の後も尽きせぬ月をこそ見ぬ
〔大鏡〕卷一、八七、醍醐天皇〔河〕も、とせの、〔孟〕〔岷〕

30 とりかへす物にもがなやとうちなげきたまひて〔三〕〔五〕14・37

とり返すものにもがなや世の中をありしならのわが身と
思はむ〔未詳〕〔釈〕前、いにしへを第三句、〔奥〕〔紫〕〔異〕

31 あはれのこりすくなき世におひいづべき人こそとて〔三〕〔五〕

7・38

いまさら何おひ出づらん竹の子のうきふししげきよとは
しらすや〔古今集〕卷十六、雑下、三〇、ものおもひける時
ときなき子を見てよめる 凡河内躬恒・古今六帖第六、た
け、〔孟〕〔湖〕〔对〕〔集〕

32 女御の御宮たちはたちゝみかどの御かたさまにわうけつきて
けだかうこそおはしませ〔三〕〔五〕9・38

けふそくをおさへてまさへ万世に花のさかりを心しづかに
〔後撰集〕卷三、賀、二三、左大臣のいへにけふそく心ざし
おくるとてくはへける 僧都二教〔河〕

33 人しれずはかなきかたみばかりをととめをきて〔三〕〔五〕11・39
結び置きし形見のこだになかりせば何に忍ぶの草をつま
し〔後撰集〕卷十六、雑二、二七、兼忠朝臣の母みまかりにけ
れば兼忠をば故枇杷左大臣の家にむすめをばきさいの宮に
さぶらはせむとあひ定めて二人ながらまつ枇杷の家に渡し
送るとてくはへ侍りける 兼忠朝臣の母のめのと・古今六
帖第三、かたみ、三三、〔孟〕むすびをく〔本歌の沙汰なく
て可然歎〕

34 たがよにかたねはまきしと人とはゞいかがいねのまつはこ
たへむ〔三〕〔五〕3・40

梓弓いそへの小松たがよにか万代かねてたねをまきけむ
〔古今集〕卷十六、雑上、三〇、題しらす 読入しらす・古今六
帖第三、弓、三三、誰が世にも〔紫〕〔異〕いはねのこ
松、〔河〕、〔弄〕第二句、〔二〕〔休〕〔絶〕、〔孟〕〔湖〕

35 万代かけて、「岷」引「新」全「事」大「評」集
はかなくすぐるひかずをもしり給はず (二五三・41)

物思ふと月日のゆくも知らざりつ雁こそ鳴きて秋を告げ、
れ(後撰集卷七、秋下、三六、題しらず、読人しらず・古今
六帖第六、かり、三五六、「秋と告げつれ」(紫)集)すぐ
る月日もしらぬまに：秋とつげくれ、(河)すぐる月日も
知らぬまに：秋とつげくれ(真本)くれ、(岷)過る月日もし
らぬまに：秋もつげくれ(私不及此歌)、(引)すぐる月日
のゆくもしらぬまに：秋とつげつれ

36 中くみちさまたげにもこそとてなきやうにおぼしほれたり
(二五三・42)

思ふ事ありてこそ行け春霞道さまたげに立ちなかくしそ
(拾遺集卷十六、雑卷、二〇七、延喜十五年齋院の屏風に霞を
わけて山寺にいる人あり 紀貫之・貫之集、二五三) 女な
ども山寺に詣でしたるを、「立ち渡るかな」(河)(孟)
37 きこえさせやるかたなうてよのつねになり侍りにけり (二五三
1・43)

恋しきはうきよのつねになりゆくを心は猶ぞ物思ひける
(未詳) (紫)集(河)(孟)(屋)引
38 たれものどめがたきよなれどをくれさきだつほどのけちめには
(二五三・43)

①明日香川しがらみ渡し塞かませば流るる水ものどにあらま
し(万葉集卷二、一七、柿本朝臣人麿・拾遺集卷六、雑上、
研究) (拾)

②末の露もとの雫や世の中の後れ先だつためしなるらむ(古
今六帖第一、零、三四七・通昭集、一六六) 世のはかなき
とぞ思ひしられて侍りしかば・和漢朗詠集卷下、無常、梵
ハ、良僧正) (対)「事」(評)集

39 おやこのみちのやみをばさる物にて (二五三・8・43)

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬるかな
(後撰集卷十五、雑一、二二) 太政大臣の左大将にてすまひの
かへりあるじし侍りける日中将にてまかりて事をはりてこ
れかれ罷りあかれけるにやんごとなき三人ばかりとどめ
てまらうどあるじ酒あまた、びの後酔にのりて子供のうへ
など申しけるついでに 兼輔朝臣・古今六帖第三、親、三三
三、「迷ひぬるかな」・大和物語、三二・兼輔集、一六六) 子
の悲しきことを集りて云ひければ、中納言) (事) (評) (集)
40 うきにもうれしきせはまじり侍りけるといといたうない給
けはひなり (二五三・2・45)

嬉しきも憂きも心はひとつにて別れぬものは涙なりけり
(後撰集卷十六、雑二、二六六、物思ひ侍りける頃やんごとなき
高き所よりはせ給へりければ、読人しらず) (紫)集)

41 ものふかうなりぬる人のすみすぎてかゝるためし心うつくし
からず (二五三・6・45)

とにかくにもは思はずひだたくみ打つ墨細の唯一筋に
(拾遺集卷十五、恋五、九〇、題しらず 人麿・柿本集、一五〇) 四
古今六帖第五、だのむる、三六〇) (紫)集(河)(孟)(岷)

42 御前ちかきさくららのいとおもしろきをことしばかりはとうち
おほゆるも (三三六・14・46)

深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりはすみぞめにさけ

(古今集卷十六、哀傷、三、堀川のおほきおほいまうち君身

まかりける時に深草の山にをさめてける後に詠みける、か

むつけの峯雄・古今六帖第四、かなしび、三三三、「野辺の

桜も」〔紫〕〔異〕〔河〕、(一)〔下句ノミ〕、〔休〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕

〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

43 おひみむことはとくちずさびて (三三九・2・46)

春ごとに花のさかりはありなれどおひみむ事は命なりけり

(古今集卷三、春下、七、題しらず、読人しらず、古今六帖

第六、花、三六三、素性、「花のにはひは…逢ひみむことぞ

命なりける」〔秋前〕、〔秋書〕春ことの、〔奥〕〔紫〕〔異〕

〔河〕(一)〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕

〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

44 この春は柳の芽にそ玉はぬく咲き散る花のゆくへ知らねば
(三三九・6・46)

①より合せて泣くなる声を糸にして我が涙をば玉にぬかなむ

(伊勢集、二二二)〔秋書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕、〔孟〕〔屋〕

よりあひて、〔評〕〔集〕

②あさみどりいとよりかけて白露を玉にもぬける春の柳か

(古今集卷三、春上、三、西大寺のほとりの柳をよめる、僧

正遍昭・遍昭集、一六六、西寺の柳を、「しら露の」〔河〕

〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔事〕〔評〕〔集〕

③驚のはるさめ々と鳴きえるはこのめも物を思ふなるべし
(未詳)〔拾〕

45 いとらう春さめかとみゆるまでのきのしづくにことならず
ぬらしそへ給 (三三〇・1・47)

春雨のふるは涙かさくら花ちるををしまぬ人しなれば

(古今集卷三、春下、八、題しらず、貫之・古今六帖第六、

さくら、三四六、黒主)〔新〕〔上句ノミ〕

46 そらをあふぎてながめ給ゆ々れのくものけしきにびいろに
かすみて (三〇六・14・48)

①夕暮は雲のけしきをみながらに眺めじと思ふ心こそつけ

(新古今集卷十六、雑下、一〇六、題しらず、和泉式部)〔紫〕

〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕夕ぐれの…見るからに、〔休〕夕霧の…

そめじとおもふ、〔紹〕夕ぐれの

②大空は恋しき人の形見かはもの思ふことに眺めらるらむ

(古今集卷十四、恋四、七、題しらず、さかゐのひとぞね、

古今六帖第一、天の原、三三三、さかゐの人ぞね)〔休〕〔紹〕

〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

47 心ちよけにひとつらなるよものこすゑもおかしう (三三六・

8・48)

緑なるひとつ草とぞ春は見し秋は色々の花にぞありける

(古今集卷四、秋上、二四、題しらず、読人しらず)〔河〕

〔孟〕

48 もの思やとはよろづのことにつけてしづかに心ほそくくらし
かねたまふた (三三九・9・48)

なき渡る雁の涙やおちつらむもの思ふやどの萩の上の露
〔古今集卷四、秋上、三三、題しらず 読人しらず〕〔紫〕、

49 ひとむらすゝきもたのもしげにひろごりてむしのねそへむ秋
思やらるゝ〔三三〕13・49
君が植ゑし一むら薄虫の音の繁き野辺ともなりにけるかな
〔古今集卷十六、哀傷、八三、藤原の利基の朝臣の右近中将に
てすみ侍りけるさうしの身かりて後人もすまずなりにける
に秋の夜ふけてものよりまうでけるついでに見いれけれ
ばもとありし前裁いと茂く荒れたりけるを見て早くそこに
侍りければ昔を思ひやりてよみける みはるのありすけ・
古今六帖第六、すゝき、三三三〕

50 ことならばならしのえだにならさなむはもりの神のゆるしあ
りきと…かしは木にはもりの神はまさすとも人ならずべきや
どのこすゑか〔三三〕9・49
〔五〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

①我が宿をいつならしてか檜の葉をならし顔には折りておこ
する〔後撰集卷十六、雑二、二二、枇杷左大臣より侍りてな
らの葉をもとめ侍りければちかぬがあひしりて侍りける家
にとりにつかはしければ 俊子・大和物語、五三、一いつか
は君がならしはの…折りておこせる〕〔紫〕〔河〕〔紹〕いっ
かは君がならの葉の、〔異〕我やどはいつかは君がならの
はの、△弄▽△細▽、〔五〕ならの葉の、〔岷〕〔湖〕〔新〕
〔全〕〔事〕〔大〕

②檜の葉の葉守の神のましけるを知らでぞ折りしたたりなき
るな〔後撰集卷十六、雑三、二四、かへし 枇杷左大臣・大
和物語、五三、一「柏木に」〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔一〕〔紹〕〔新〕〔全〕
〔対〕柏木に〔初句〕、△弄▽△細▽△岷▽〔事〕〔大〕

51 おもはしなげくはよのことわりなれど〔三三〕4・50

秋風のふけばさすがに佗しきはよのことわりと思ふ物から
〔後撰集卷五、秋上、二五、思ふこと侍りて 読人しらず〕
〔紫〕〔異〕〔五〕わびしはた、〔河〕

52 さすがにかぎりある世になむとなくさめきてえ給〔三三〕6・

50

恋しさの限だにある世なりせば年へて物は思はざらまし

〔是則集、一六五、古今六帖第三、としへていふ、三三三〕統
古今集卷十四、恋四、一三四、題しらず 坂上是則〕〔五〕つら
きをしるてなげかざらまし、〔岷〕

53 などてみるめにより人をも思あき又さるまじきに心をもまど
はすべきぞ〔三三〕10・51

伊勢の海人の朝な夕なにかづくてふみるめに人をあくよし
もがな〔古今集卷十四、恋四、六三、題しらず 読人しらず・
古今六帖第三、みるめ、三三三〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔五〕〔引〕〔拾〕
〔事〕〔評〕

横笛

1 御てらのかたはらちかきはやしにぬきいでたるたかうなそのわたりのやまにはれる所などの山ざとにつけてはあはれなればたてまつれ給とて(二三〇三・56)

①春の野に野老^{とら}求むといふなるはふたりぬばかり見出たりや君(拾遺集卷十六、雑春、二三三、春ものへまかりけるにつは装束して侍りける女どもの野辺に侍りけるをみて何わざするぞと問ひければ野老ほるなりと応へければ 賀朝法師)

〔異〕、〔河〕みでたりや君、〔休〕〔細〕〔孟〕〔眠〕〔余〕

②春の野にはるくみれどなかりけり世に所せき人の為には(拾遺集卷十六、雑春、二三三、かへし よみ人しらず) 〔異〕

〔河〕〔休〕〔細〕〔孟〕〔眠〕〔湖〕〔新〕

③世の中に経るかひもなき竹の子は我が経む年を奉るなり(大鏡卷四、二六、花山院・詞花集卷六、雑上、三三〇、冷泉院へたかんな奉らせ給ふとよませ給ひける 花山院御製)

〔最〕わがつむとしをたてまつる哉、〔異〕〔初〕〔孟〕〔我〕がつむ年を、〔眠〕〔湖〕〔新〕

④年経ぬる竹の齢は返してもこの世を長くなきむとぞ思ふ(大鏡卷四、二六、冷泉院・詞花集卷六、雑上、三三三、御かへし 冷泉院御製) 〔最〕、〔紫〕いろかへぬ竹のよはひを、

〔異〕、〔河〕〔孟〕竹のよはひを、〔細〕〔眠〕

2 けふかあすかの心ちするぞ(二三〇四・57)

けふかともあすともしらぬ白菊のしらぬいく世をふべき我が身ぞ(拾遺集卷十六、雑春、二三三、女のもとに菊を折りて遣はしける 読人しらず) 〔河〕〔孟〕〔引〕

3 うき世にはあらぬところのゆかしくてそむく山ちと思ひこそいれ(二三三三・57)

世の中にあらぬところもえてしがな年ふりにたるかたち隠さむ(拾遺集卷六、雑上、三三六、題しらず 読人しらず)

〔異〕〔河〕〔細〕、〔休〕うき世には〔初〕、〔孟〕〔眠〕〔湖〕〔引〕〔事〕〔大〕

4 花のさかりはありなめどうちまもりきこえたまふ(二三三二・59)

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見む事は命なりけり(古今集卷三、春下、三〇、題しらず 読人しらず・古今六帖

第六、花、三六五、索性、「花の匂ひは……逢ひみむことぞ命なりける」〔釈前〕、〔奥〕〔上句ノミ〕、〔紫〕〔異〕〔河〕、

〔一〕〔下句ノミ〕、〔細〕〔休〕〔細〕〔孟〕、〔屋〕〔初〕ノミ、〔眠〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔二〕〔評〕〔集〕

5 たかうなをつとにぎりもちてしづくもよとくひぬらし給へば(二三三二・59)

五月雨の夜毎なきつゝ郭公袖のひるまもなきぞ悲しき(敦忠集、また、二三三三) 〔花〕〔孟〕よと鳴きつゝ、〔休〕〔細〕

6 うきふしもわすれずながらくれ竹のこはすてがたき物にぞありける(二三三二・59)

今さらに何おひ出づらむ竹の子の憂き節しげきよとは知ら

ずや〔古今集卷六、雑下、空音、ものおもひける時いと
なき子を見てよめる 凡河内躬恒・古今六帖第六、たけ、
三三三、躬恒〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔五〕〔岷〕〔引〕〔事〕
〔集〕

7 秋の夕のものあはれなるに一条の宮をおもひやりきこえ給て
〔三三三・60〕

①春はたゞ花のひとつへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされ
る〔拾遺集卷六、雑下、三二、題しらず、読人しらず〕〔河〕
〔五〕

②常よりも物思ふ人のまさるかなうへもいひけり秋の夕暮
〔元真集、三〇四、新拾遺集卷六、雑上、一〇、題しらず
藤原元真、「物思ふ事の……むべもいひけり〕〔余〕

8 をさなき君たちなどすだきあわて給ふにならひ給て〔三三三
7・61〕

あし鴨のすだく池水増るともぬせきの方に我こひめやは
〔古今六帖第三、池、三三三、万葉集卷二、二六三、「あふると
も儲溝ほくらの方に吾越えぬやも〕〔河〕〔五〕

9 せむざいの花どもむしのねしげきのへとみだれたる夕ばへ
〔三三三・61〕

君が植ゑし一むら薄虫の音の繁き野辺ともなりにけるかな
〔古今集卷六、哀傷、六三、藤原の利基の朝臣の右近中将に
てすみ侍りけるさうしの身まかりて後人もすまずなりにけ
るに秋の夜ふけてものよりまうできけるついでに見いれけ
ればもとありし前裁いと茂く荒れたりけるを見て早くそこ

に侍りければ昔を思ひやりてよみける みはるのありす
け・古今六帖第六、すゞき、三三三、〔萩前〕ひととすゞ
き、〔奥〕第二句ノミ、〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕〔紹〕〔五〕
〔岷〕〔湖〕〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

10 はやこの御ことにもこもり侍らんかし〔三三三14・61〕

琴取れば嘆き先立つたたくも琴の下樋したひに濡ぬれこもれる
〔万葉集卷六、二二、古今六帖第六、こと、三三三、〕妻やか
くれる〕〔新〕〔下句ノミ〕

11 ことをたえにしのちよりむかしの御わらはあそびのなごり
をだに〔三三三1・61〕

なき人は訪れもせで琴の緒をたちし月日ぞ帰りきける
〔後拾遺集卷五、恋、九三、母におくれ侍りて又の年のわ
ざなど過ぎてつれづれに侍りけるを夕暮に塵積りたる琴な
どおしのごひてひくとはなければど今は程など過ぎにければ
をりくならしけるををばなりける人のおひすみける方よ
り、ことの音きけば物ぞかなしきなどいひおこせて侍りけ
る返事によめる 大納言道綱朝臣〕〔紫〕〔異〕〔五〕〔岷〕音
づれもせず……めぐりきける、〔河〕〔休〕めぐりきけ
る〔第五句〕、〔引〕〔拾〕、〔新〕琴の緒の、〔余〕〔大〕

12 むかしの御わらはあそびのなごりをだにおもひいでたまはず
なん〔三三三2・61〕

13 世のうきつまにといふやうになむみ給るときこえ給へば〔三
思ふとはつみしらせてきみくなくさわらは遊びのてたはぶ
れより〔未詳〕〔紫〕、〔異〕ひくなくさ、〔河〕〔休〕〔五〕

五〇・62)

浅茅生の小篠が原におく露ぞ世のうきつまと思ひみだるる
〔未詳〕〔釈前〕〔奥〕〔紫〕、〔異〕をく露は、〔河〕をく露の、

〔細〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕〔新〕〔全〕〔対〕
〔事〕〔大〕

14 かぎりだにあるとうちながめてことばおしやり給へれば(三
五〇・62)

恋しきの限りだにある世なりせば年へてものは思はざらま
し(古今六帖第五、としへていふ、三五七・是則集、二名齋・
続古今集卷古、恋四、三三四)〔釈前〕〔奥〕、〔紫〕〔二〕〔細〕

〔紹〕〔孟〕〔屋〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔拾〕つらきをしめてなげかざ
らまし、〔河〕つらきをしめてなげかざらまし(奥入、年
へて物はおもはざらまし・伊行尺、いかで世中うちらみは
つべき)、〔異〕〔休〕〔新〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

15 かねなをさらはこゑにつたはることとまよとまよわくばかりな
らさせ給へ(三五七・62)

琴の音を聞き知る人の有りければ今ぞ立ち出て緒をすすぐ
べき(古今六帖第六、こと、三五三)〔紫〕〔河〕まよわく人
のあるなべに、〔休〕〔紹〕聞き分く人のあるなべに今ぞた
ちはてし、〔孟〕まよわく人のあるなべに今ぞたちいでし
16 月さしいでまよもりなき空にはねうちかはすかりがね(三五
11・62)

①白雲にはねうちかはしとお雁の数さへみゆる秋のよの月
(古今集卷四、秋上、二九、題しらず 読人しらず・古今六

帖第一、秋の月、三五六・和漢朗詠集卷上、秋、月、三五九)

〔釈前〕〔釈書〕〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔全〕〔全〕
〔対〕〔事〕〔評〕〔集〕

②秋毎につらなを離れぬ雁かねは春帰るとも変らざらなむ(後
撰集卷七、秋下、四四、題しらず 読人しらず)〔異〕〔休〕

秋風に……かへらざらなん、〔河〕〔孟〕〔岷〕〔引〕〔全〕秋風
に……春はくるとも帰らざらなん、〔紹〕秋かせに

17 風はだきむくものあはれなるにさそはれて(三五三・62)

はだ寒く風は夜ごとになりまさる我が見し人はおとつれも
せず(曾丹集、三三六)〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕吹きまさるわが

思ふいもは、〔休〕

18 かたはらいたけれどこれはこととはせ給べくやとて(三五三・
63)

こと問はぬ木にもありとも我がせこが手馴れのみことつち
に置かめやも(古今六帖第五、かへし、三五三・万葉集卷五
三三)〔余〕

19 ことにいでまよいはぬもいふにまさるとは人にはちたるけしき
をぞみる(三五五・63)

心には下行く水のわかかへり言はで思ふぞいふにまされる
(古今六帖第五、いはで思ふ、三四四)〔紫〕〔異〕〔河〕〔休〕
〔孟〕〔岷〕〔引〕〔事〕〔集〕

20 たまのをにせむ心ちもし侍らぬ(三五二・64)

片糸をこなたかなたによりかけてあはずは何を玉の緒にせ
む(古今集卷十一、恋二、四三、題しらず 読人しらず・古今

六帖第廿、玉の緒、言「かなたこなたに」・是則集、一
〔奥〕〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔初〕〔ミ〕、〔一〕〔細〕〔休〕〔紹〕
〔五〕〔屋〕、〔岷〕〔引歌にそよばざるなり〕、〔引〕〔余〕〔全〕
〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

21 いもとわれといるさの山のとこゑはいとおかしうてひとり
ちうたひて (二三六・4・65)

婦と我と いるさの山の 山やま 手て取とり触ふれそや 貌むま優ゆう
るがにや 速はやく優やさるがにや(催馬楽、婦と我、三)〔釈前〕

いもとあれといるさの山のやまあらきてなとりふれそ
やかほまさるかにやと、ままさるかにやと、(釈書)、

〔奥〕伊毛与あれと以留左のやまのやまあらきてなとりふ
れそ、やかほまさるかにやとくまさるかにや、〔紫〕〔異〕

〔河〕〔一〕(細)〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔全〕〔対〕
〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕

22 かゝる夜の月に心やすくゆめみる人はあるものか (二三六・7・65)

かくばかり惜しと思ふ夜をいたづらに寝て明すらむ人さへ
ぞ憂うれき(古今集卷四、秋上、一、二)、かむなりのつばに人々集

りて秋の夜惜しむ歌よみけるついでによめる 躬恒
〔紫〕〔異〕〔河〕、〔弄〕〔第二句ノミ〕、〔一〕〔休〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕

〔湖〕〔引〕〔新〕〔対〕〔事〕〔大〕〔集〕

23 笛たけにふきよる風のことならばすゑのよながきねにつたへ
なむ (二三六・8・67)

おひ初むるねよりぞ著き笛竹の末の世長くならむ物とは

(拾遺集卷五、賀、二)、天曆の御時清慎公御文奉るとてよ
ませ侍りければ 能宣(紫)〔異〕〔河〕〔孟〕おひそめし

24 よふかき御月めでにかうしもあけられたれば (三三二・2・67)

大方は月をもめでじこれぞこの積れば人の老となるもの
(古今集卷十、雑上、八)、題しらず 業平朝臣・伊勢物語、
一、三・業平集、一、三・古今六帖第一、雑の月、三、三〔河〕
〔孟〕

25 いまはのとちめに一ねむのうらめしきもしはあはれとも思
にまつはれてこそはながきよのやみにもまどふわざなれ

(三三二・12・68)

手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にこそ有けれ
(拾遺集卷三、哀傷、一、三)、世中心ほそく覚えて常ならぬ

心ちし侍りければ公忠朝臣のもとによみて遣はしける、こ
のあひだ病重くなりけり 紀貫之・貫之集、一、六〔孟〕、世

の中の心細くおぼえ常の心地もせざりければ源公忠朝臣の
許に此の歌をなむ詠みてやりける比のあひだに病重くなり

にけり(異)〔河〕〔休〕〔紹〕、〔孟〕〔岷〕水にうつれる…世
にぞ有りける

鈴虫

- 1 よしのちの世にだにかのはなの中のやどりにへだてなくともほせとてうちなき給ひぬ はちす葉をおなじうてなと契をきて露のわかるゝけふぞかなしき (三三〇・79)
- けふよりは露のいのちもをしからず蓮の上の玉と契れば (拾遺集卷三六、哀傷、一四三、左大将濟時白川にて説教せさせ侍りけるに、実方朝臣・実方集、三三〇、白川殿の結縁の八講に) (異)〔事〕
- 2 げにありはてぬ世いくはくあるまじけれど (三五五・81)
- ありはてぬ命まつまのほどばかり憂きことしげく思はずもがな (古今集卷十六、雑下、九三、つかさとけて侍りける時よめる、平貞文・大和物語、六三、「歎かずもがな」) (紫)〔異〕、〔河〕なげかずもがな、〔休〕〔細〕〔孟〕〔畷〕、〔湖〕 (第三三四句ノミ、〔引〕〔全〕〔対〕〔事〕〔大〕〔評〕〔集〕)
- 3 大かたの秋をばうとしりにしをふりすてがたきすむしのこゑ (二二七・84)
- 鈴虫の声乱れたる秋の野はふりすて難き物にぞありける (玉葉集卷四、秋上、二四、秋の歌とて、藤原敏行朝臣) (河)〔五〕
- 4 こよひ月のえんあるべかりつるをとまりてさうくしかりつるに (三九六・85)
- こゝにだに光りさやけき秋の月雲の上こそ思ひやらるれ
- (拾遺集卷三、秋、一五、延喜の御時八月十五日夜藏人所のをのこども月のえんし侍りけるに、藤原経臣) (孟)〔湖〕
- 5 月みるよひのいつとも物あはれならぬ折はなき中にこよひのあらたなる月の色にはげになをわが世のほかまでこそよろづ思ながさるれ (三九六・85)
- いつとも月みぬ秋はなきものをわきて今宵のめづらしきかな (後撰集卷六、秋中、三三、八月十五夜、藤原雅正) (河)〔細〕〔休〕〔孟〕〔畷〕〔湖〕〔引〕〔事〕〔評〕〔集〕
- 6 故権大納言なにの折くにもなきにつけていとゞしのはるゝことおほく (三九七・85)
- ある時はありのすさびに憎かりきなくてぞ人は恋しかりける (未詳) (紹)〔孟〕〔畷〕
- 7 花とりの色にもねにも思ひはきまへ (三九七・85)
- 花鳥の色をも首をもいたづらにもうかる身はすぐすのみなり (後撰集卷四、夏、三三、かへし、藤原雅正・貫之集、一〇二、返し、「色をも香をも…すぐすなりけり」) (紫)すくばかりなり、〔引〕〔余〕〔事〕〔評〕
- 8 おなじくはときこえ給へれば (三九七・86)
- あたら夜の月と花とを同じくは心しれらむ人に見せばや (後撰集卷三、春下、〇三、月の面白かりける夜花を見て、源信明・信明集、二〇三、いきたるにあはねば、「哀しれらん」) (紫)〔異〕〔河〕〔休〕あはれしれらん、〔弄〕〔一〕〔初句ノミ〕、〔細〕〔千句ノミ〕、〔紹〕〔孟〕〔畷〕〔湖〕〔引〕〔新〕〔事〕〔評〕〔集〕

9 月かげはおなじ雲井にみえながらわがやどからの秋ぞかはれる (二五九・86)

試みにほかの月をも見てしがな我が宿からの哀なるかと
〔大鏡巻五、二七、花山院・詞花集巻六、雑上、二五九、題しらす、花山院御製〕〔紫〕〔異〕〔河〕〔細〕〔休〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕

〔引〕〔対〕〔入〕〔評〕

10 なにゝもつかぬみのありさまにてさすがにうるゝしくとこそせく侍て (三〇一・87)

東路の名こそその関のよぶこどりなにゝつくべきわが身なるらん (未詳) 〔引〕〔余〕

11 いとつねなきよの心ほそさのゝどめがたうおほえ侍れば (三〇三・87)

恋死なばたが名はたゝじ世の中の常なき物といひはなすと
も (古今集巻十、恋三、三三、題しらす、深養父) 〔河〕〔孟〕

12 おほつかなさのまさるやうにおもひ給へらゝ有様を (三〇四・88)

眺めやる山辺はいとゞ霞みつゝ筑東なさのまさる春かな
〔拾遺集巻十三、恋三、二七、冬よりひえの山にのぼりて春まで音せぬ人のもとに、藤原清正が女) 〔紫〕〔異〕〔河〕〔孟〕、

〔岷〕〔私不及引歌〕、〔湖〕〔引〕

13 みな人のそむきゆく世をいとはしうおもひなることも (三〇九・88)

皆人の背き果てにし世の中にふるの社の身をいかにせむ
〔齋宮集、一五三、女三宮御草子かゝせ奉り給ひけるに葦手

長歌など書かせ給ひて奥に同じ所・新古今集巻六、雑下、三五、さうしにあしでなが歌などかきておくに、女御微子

女王) 〔河〕、〔細〕〔紹〕〔孟〕〔岷〕〔湖〕〔引〕〔新〕そむきはてぬる、〔休〕〔大〕〔評〕〔集〕

14 をのづからおもひかゝつらふほだしのみ侍るを (三〇一・88)

世の憂きめ見えぬ山路へ入らむには思ふ人こそほだしなりけれ (古今集巻六、雑下、五五、おなじ文字なき歌、物部よしな) 〔事〕

15 いとかなしういみじくてなべての世のいとほしくおほしなりて (三〇七・89)

大方のわが身一つの憂きからになべての世をも恨みつるかな (後撰集巻七、雑三、二三三、題しらす、読人しらす、拾遺集巻十、恋五、五五、題しらす、貫之) 〔余〕

16 しづかなるほいもなきやうなる有様にあけくらし侍りつゝ (三〇七・90)

あけ暮し守るたのみをからせつゝ袂そほづの身とぞ成りぬる (後撰集巻五、秋上、二六、二人の男に物いひける女のひとりにつきにければ今一人がいひつかはしける、読人しらす) 〔大〕